

遺跡発掘事前総合調査事業に係る
埋蔵文化財調査報告

千坊山遺跡(1)

1995年3月

富山県婦中町教育委員会

序

婦中町自然公園には、中世に越中の北嶽山として隆昌をきわめたと伝えられる各願寺があります。この一帯は埋蔵文化財の宝庫といわれており、千坊山遺跡は各願寺の東にある一つの丘陵を範囲としています。

さて今回、平成6年度遺跡発掘事前総合調査事業として、この千坊山遺跡の試掘調査を実施いたしました。当遺跡からは旧石器時代から中世に至るこの地域の歴史の縮図を見る事ができました。このうち弥生時代の竪穴住居跡は25棟も見つかり、これほどまとまつて発見されたのは県内でははじめてです。また、中世に築かれた塚状遺構も、非常に大きく、2重の周溝を巡らす珍しいものであります。

ここに千坊山遺跡の試掘調査の成果をまとめ、今後の調査研究を進めるための参考としていただければ幸いに思います。

婦中町には、他にも数多くの貴重な遺跡があり、当教育委員会では子どもたちや一般の方々に対する現地説明会の実施など、埋蔵文化財に対する理解を深めて頂こうと努力している所であります。今後も遺跡の保護や活用に心がけ、より一層の理解に役立てていきたいと考えております。

最後に、調査に対してご協力いただきました地域の方々、関係機関の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご協力とご指導を賜りたく、この場を借りてお願い致します。

平成7年3月

婦中町教育委員会
教育長 清水信義

例 言

- 1 本書は、富山県婦負郡婦中町長沢・新町・羽根地内に所在する千手山遺跡の埋蔵文化財調査報告である。
2 事業は、文化庁・富山県教育委員会の指導を得て、「遺跡発掘事前総合調査（遺跡カルテ）」によって実施した。
3 現地調査・遺物整理にあたっては、富山県埋蔵文化財センターからの職員の派遣を受けた。
4 調査期間・面積は次のとおりである。
調査期間 平成6年4月22日～同年12月22日（実働85日）
調査対象面積 約72,000m²
免抵面積 約6,080m²
5 調査体制は以下のとおりである。
調査指導 文化庁記念物課
調査委員会 日本考古学会会員
富山県埋蔵文化財センター
婦中町文化財保護審議委員・婦中町史編纂委員
古里地区自治振興会
古里公民館
婦中町教育委員会
婦中町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター
同 同
同 同
同 同
6 調査担当者 生涯学習課 文化財保護主事
調査員 生涯学習課 主任
同 同
同 同
同 同
7 調査事務局 婦中町教育委員会 生涯学習課 長
同 文化振興係長
8 なお、作業員・仮設事務所敷地・駐車場の確保については、婦中町シルバー人材センター・射水建設興業㈱・鶴ソガ林業の協力を得た。
9 資料の整理、本書の編集と執筆は、富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得て調査担当者がこれに当たった。
10 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から援助を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略 五十音順）
荒木宗男・宇野勝大・沢村栄義・越前慶祐・金子清・亀井正夫・久々忠義・高瀬保・高梨清志・西井龍儀・
宮田進一・若林幸
11 本書の脚注・写真図版の表示は次のとおりである。
方位は真北、水平基準は海抜高である。
遺構の表記は次の記号を用いた。
堅穴住居跡：S I 潟：SD 土坑：SK ビット：SP
12 出土品および記載資料は、婦中町教育委員会が保管している。
13 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。
生田寿美子・中坪千春（現地作業員）
生田寿美子・中坪千春・高田和代・竹内宗健（整理作業員）
関清美・真田裕美・山崎八重子（事務作業員）
大平宗央子・福石純子・紫川和也・大野厚也・塙田明弘・三林健一・佐藤聖子・古沢亜希子・近藤美紀・
勾坂友枝・大泰司統・内田正紀・福海貢子（調査補助員）

目 次

序 文	1
例 言	1
目 次	1
I 遺跡の環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
II 調査に至る経緯	4
III 調査の経過と方法	5
1 調査の経過	5
(1) 事前調査	5
(2) 発掘調査	6
2 座標軸の設定と各地区的呼称	9
IV 調査の概要	11
1 事前調査	11
(1) 分布調査	11
①概況	11
②遺物	11
(2) 地籍図と古絵図の検討	14
(3) 開発と地形の変化	16
2 発掘調査	17
(1) A 地区	17
①概況	17
②層序	17
(2) B 地区	17
(3) C 地区	21
①概況	21
②層序	21
③遺構	21
④遺物	21
⑤小結	22
(4) D 地区	23
①概況	23
②層序	23
③遺構	23
④遺物	25
⑤小結	26
(5) E 地区	27
①概況	27
②層序	27
③遺構	27
④遺物	28
⑤小結	28
(6) F 地区	28
①概況	28
②層序	28
③遺構	28
④遺物	28
⑤小結	28
(7) G 地区	28
①概況	28
②層序	28
③遺構	28
④遺物	28
⑤小結	28
(8) H 地区	28
V まとめ	30
参考文献	32
写真図版	32

挿図目次

第1図 千手山遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡分布図	1
第3図 地形及び区割図	1
第4図 地区割図	1
第5図 分布調査結果	1
第6図 遺物実測図	1
第7図 遺物実測図	1
第8図 地籍図	1
第9図 A 地区土層断面図	1
第10図 B 地区土層断面図	1
第11図 (伝) 樹木大の墓平面図	1
第12図 (伝) 行人冢構造模式図	1
第13図 (伝) 行人冢土層断面図	1
第14図 テラス状構築平面図	1
第15図 (伝) 天見六郎屋敷跡平面図	1
第16図 A 地区遺構配置図	1
第17図 A・B 地区遺構配置図	1
第18図 C 地区遺構配置図	1
第19図 (伝) 行人冢平面図	1
第20図 A 地区遺物実測図	1
第21図 A 地区遺物実測図	1
第22図 B・C 地区遺物実測図	1
表 1 周辺の遺跡一覧	1
表 2 調査工程表	1

I 遺跡の環境

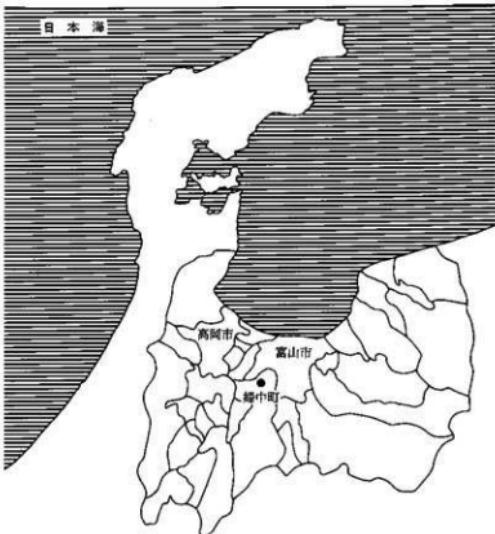
1 地理的環境（第1・2図）

本書で報告する千坊山遺跡は、富山県婦負郡婦中町字長沢・新町・羽根地内に所在する。

富山県は、県中央部に南北に連なる呂羽丘陵で東西に二分され、それぞれ「呂西」「呂東」と称されている。婦中町は後者の呂東に入るが、位置的には県の中央部にあり、北側は県庁所在地である富山市と接している。

町の地形は、おおむね西側の丘陵部と東側の平野部の二つに分けられる。丘陵部は先述の呂羽丘陵から射水丘陵を経て、南の牛岳へと連なっている。一方、平野部は神通川とその支流である井田川が形成した扇状地が広がり、富山平野へと続いている。

町西南部の山谷を曲流する山田川は、古里地区で平野部に出る。そして、千坊山遺跡の



第1図 千坊山遺跡の位置

南に流れる辺昌川を合わせた後、平野部中央部で主流・井田川と合流する。古里地区以北の井田川・山田川左岸には河岸段丘が南北にのびている。千坊山遺跡はその最南端にある一つの独立丘陵全体を範囲としている。遺跡の現況は畑・林・墓地・荒れ地・グランド等で、南西部は土砂採集によって既に削平されている。遺跡のある丘陵からは、富山平野や立山連峰を一望することができる。現在この一帯では、県道八尾・小杉線に沿って集落が形成されている。

2 歴史的環境（表1・第2図）

呂羽丘陵づたいには、旧石器時代から中近世に至る各時代の遺跡が数多く存在し、県下でも有数な遺跡の密集地帯として知られている。千坊山遺跡周辺もその内に含まれ、富山市側に至るまで遺跡が続く。また、それらの遺跡群のある丘陵から山田川を挟んで南側の丘陵にも、古墳群のほか山城・城館などが集中して築かれている。それに対して、それらの丘陵のすぐ西側の平野部にはほとんど遺跡が確認されていない。その原因は、もともと遺跡の分布状況が希薄であるからとも、町内全域を網羅する分布調査がまだ実施されていないことが影響しているからとも考えられる。

このように山田川北方には、当遺跡と時期を同じくする遺跡はほとんど見当たらないが、南側になると富山遺跡など弥生時代の遺跡が5つある。そのうち、富崎城遺跡には四隅突出型墳丘墓（富崎1号墓）がある。山陰地方の影響を受けて成立した四隅突出型墳丘墓は、北陸地方では4例が確認されるのみである。うち2例が富山県で、一つが富山市の杉谷4号墓、もう一つがこの富崎1号墓である〔古川1994〕。なお、墳丘墓周辺からは千坊山遺跡と同時期の弥生土器が採集されている〔岡本1991〕。平野部に所在する弥生時代の遺跡に高日附遺跡がある。そしてそのすぐ南には南部I遺跡が広範囲に広がっている。南部I遺跡は、千坊山遺跡とほぼ同時期の遺跡であるが、範囲がまだ確定されていないため図には記していない。

上記以外の主な周辺遺跡としては、各願寺前遺跡（編文・奈良・平安・中世）、新町II遺跡（編文・奈良・平安・中世・近世）、富崎遺跡（弥生・古墳・古代・中世・近世）、添ノ山古墳群・新町横穴墓・新町大塚古墳・五つ塚・小長沢古墳群・富崎千里古墳群（古墳）、蓮花寺遺跡（中世）などがある。その他特記すべきものに、千坊山遺跡西

方 0.9kmに位置する国指定史跡の王塚古墳、そして谷一つ隔てたその南にある県指定史跡の勅使塚古墳がある。どちらも前方後方墳で、古墳時代初期の築造である。また勅使塚は県下最大級の古墳としても知られている。古墳がこの地域に集中して築かれることからも、当時この周辺には有力者が存在し、古墳群を形成する基盤の集落があったことが伺える。

そのほかに、広くは知られていないが、古里地区には3箇所の方形のマウンド〔古里公民館1994〕が存在している。このうち地元の伝承で「六治古塚」「向野塚」と呼ばれる2つの塚は、千坊山遺跡西方の向野台地上にある。「六治古塚」は辺呂川流域を望む向野台地の南端にあり、丘陵の先端部を利用し、2段に築造されているという。規模は一辺が25mを測る。なお、六治古とは、長沢の開祖と伝えられる伝説の人物である。「向野塚」は、前述の「六治古塚」の北側約 200mに位置する。一方、「古宮塚」と呼ばれる塚はそれらと少し離れ、旧長沢の古宮本殿裏にある。千坊山遺跡南西の台地上に位置し、山田川流域を見おろす場所にある。一辺は17mを測る。言い伝えによると、国勝長狹の子孫・貞治古（六治古の父）を宮治命として祀っているといわれる。これらの塚は3箇所とも時代や性格は不明である。また、対角線を南北方向に合わせており、この点で千坊山遺跡の塚と共通性がみられる。地元では、この他にも幾つか消滅した塚もあったとも伝えられている。

遺跡から南を望むと、山田川を挟んで対岸の丘陵先端部に富崎城跡がある。富崎城は越中最大の豪族神保氏の重要な拠点のひとつで、それを中心として16の城館から構成される富崎城星群は県内屈指の規模を誇っている。富崎城星群は山田川に沿うようにして築かれており、神保氏は山田川筋（山田谷）で大きな勢力を蓄ったことが推測される〔佐伯1991〕。中世には、この地は富山平野から砺波平野へ抜ける軍事上・交通上の要所として、重要な位置を占めていたことが伺える。

なお、当遺跡の北東 250mには、古代から丘陵地帯の仏教文化の中心をなしてきたとされる各願寺がある。各願寺は大宝元年（701年）に創建されたと伝えられ、建武二年（1335年）に、越中の守護普門俊清と国司中院定清の戦いに巻き込まれて兵火により失われた。しかしこの後、200余年を経て、大永三年（1523年）に玄弘僧都に再建されて今日に至っている〔婦中町1967〕。

（片岡）

No	遺跡名 称	種 別	時 代	19 小長沢 I 遺跡	散 布 地	奈 良・平 安
1	千坊山遺跡	散布地・集落・塚	旧石器・繩文・弥生・平安・中世・近世	20 小長沢北塚	塚	不 明
2	向野塚	塚	不 明	21 総野Ⅱ遺跡	散布地	繩 文
3	六治古塚	塚	不 明	22 家老堀敷跡	山 城	中 世
4	古里三塚前塚	散布地	繩文・弥生	23 長沢城跡	山 城	中 世
5	各願寺前遺跡	散布地・寺院	繩文・奈良・平安・中世	24 銀坂Ⅰ遺跡	集 落	繩 文
6	五つ塚	古 墓	古 墓	25 蓮花寺遺跡	寺 院	中 世
7	勅使塚古墳	古 墓	古 墓	26 古宮塚	塚	不 明
8	王塚古墳	古 墓	古 墓	27 富崎城跡	散 布 地・坂道・井 房	繩文・弥生・中世
9	新町横穴墓	横穴墓	古 墓	28 富崎遺跡	散 布 地	弥生・古墳・古代・中世・近世
10	新町Ⅰ遺跡	集 落	繩文・奈良・平安・中世・近世	29 富崎千畝古墳群	古 墓	古 墓
11	新町大塚古墳	古 墓	古 墓	30 磐山砦	散 布 地・山 城	中 世
12	新町Ⅱ遺跡	散布地	古墳～平安	31 富崎赤坂遺跡	散 布 地	弥生・中世
13	派ノ山古墳群	古 墓	古 墓	32 下瀬岩	山 城	中 世
14	二本櫻Ⅰ遺跡	散布地	繩文・奈良・近世	33 赤坂砦	山 城	中 世
15	宮ノ高B遺跡	散布地	繩 文	34 森田山砦	山 城	中 世
16	宮ノ高A遺跡	散布地	繩 文	35 堀割砦	山 城	中 世
17	小長沢古墳群	古 墓	古 墓	36 大館城跡	城 館	中 世
18	平岡遺跡	散布地	繩 文	37 高日附遺跡	散 布 地	弥 生

表 1 周辺の遺跡一覧



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/20,000)

II 調査に至る経緯

千坊山遺跡は、古くから遺物量の豊富なことや遺跡の規模が大きいことなどで著名であった。しかし、過去に採集された遺物により旧石器・縄文時代の埋蔵文化財を有することは推測できたものの、その実体はほとんど不明であった。

昭和47年、県道富山・砺波線の交通増加に伴い、富山県富山土木事務所の主管により長沢バイパス工事が着手された。しかし、その工事の計画線は、千坊山遺跡の中央を貫くことになっていた。その為、遺跡の保護にむけ、範囲と性格を明らかにするための早急な調査が必要となった。昭和49年5月8日には、それに先立った協議の場が設けられ、文化財サイドからは県教育委員会文化課・婦中町教育委員会・建設サイドからは県道路建設課・県富山土木事務所・婦中町建設課が出席した。この協議結果から、遺跡のバイパス予定路線にかかる部分を試掘調査し、発掘調査の是非を決定することになった。

試掘調査期間は、昭和49年5月13日～同年5月17日の延べ5日間で行った。調査にあたっては県教育委員会の職員の派遣を受けた。調査方法は、人力で地山まで掘り下げて、遺構・遺物の有無の確認を行った。調査対象面積は14,776m²で、バイパス予定路線を中心に、丘陵全域に1m四方の試掘坑を10m間隔で計133箇所にいた。その結果、丘陵中央部に3棟、東側斜面に1棟の堅穴住居跡が確認された。調査では、住居跡の床面や柱穴の一部を確認しており、それらは良好な遺存状況を示していた。また、遺物としては、弥生土器の壺・高杯・鉢等が丘陵全域にわたり散布していた。これらの状況を考え合わせると、付近一帯には、他に多数の遺構が存在するものと予想された。

ところで当遺跡の近くには多くの古墳があり、このうち国指定史跡の王塚古墳や県指定史跡の勘使塚古墳の築造年代は古墳時代初期である。試掘調査結果からは、確認された堅穴住居跡は弥生時代末～古墳時代初期のものと考えられたため、千坊山遺跡に形成された集落はそれらの古墳を造る基盤となった集落の可能性があるとして大きくクローズアップされることになった。

この結果をもとに、後日道路の問題について文化財・建設両サイドで協議を行ったところ、遺跡の重要性をかんがみて路線変更が決定し、バイパスは遺跡を回避して北西にまわりこんで敷かれることになった。

平成5年には、遺跡の南西端にある長沢稻荷社の建て替えが計画された。婦中町教育委員会では、これに先立ち、県埋蔵文化財センターの協力を得て、同年6月14日に神社境内の試掘調査を行った。調査方法は、重機及び人力により5箇所のトレチを発掘し、遺構・遺物の遺存状況を確認した。神社の建築計画面積は約986m²であり、試掘による発掘面積は87m²であった。この試掘調査では、遺構・遺物は発見されず、どのトレチでも表土直下はすぐに地山となっていた。そのため付近は、明治年間・旧境内造成時に地山まで削平されたものと考えられ、平成6年には新しい神社が完成した。

ところで、近年、埋蔵文化財の保護と開発計画との調整に長期間を有する事例が増え、対応の迅速化が要請されてきている。そこで文化庁では、平成3年度より全国で年間3箇所を選定して、「遺跡発掘事前総合調査事業」を実施されている。この事業は、将来大規模な開発が予想される地域において、試掘調査等により埋蔵文化財の範囲・性格・遺構の状況等、開発側との調整の為に必要な諸知見を事前に把握することを目的とされている。把握したデータからは、調査報告書と遺跡カルテ（調査によって得られた情報を盛り込んだ遺跡全体地図）を作成する。

千坊山遺跡は、国道359号線沿いにあり、地理的には今後の開発が十分予想される環境である。また、以前から遺跡の性格に対する地元の強い要望もある。そこで、先述の「遺跡発掘事前総合調査事業」の候補として当遺跡が名乗りを挙げたところ採択され、平成6年度に実施する運びとなった。なお、当初の計画では、丘陵のうち削平されていると考えられた箇所を除く6.5haを対象とした。

（片岡）

III 調査の経過と方法

1 調査の経過 (表2)

(1) 事前調査

分布調査

分布調査の実施に先立ち、千坊山遺跡で多くの遺物を採集された西井龍儀氏、亀田正夫氏より、採集した場所等の聞き取り調査をした。これらの遺物は、旧石器から近世に至る幅広いものであった。その多くについては、既に富山考古学会機関誌の『大境』で報告されている〔西井・藤田1976〕。

婦中町教育委員会では、前述の遺物の分布状況を参考として、平成6年4月22日、県埋蔵文化財センター職員と富山大学考古学研究室の学生の協力のもとに、千坊山遺跡周辺を踏査して遺物の散布状況を確認した。またそれに合わせて地形観察もを行い、その成果を地形測量の際に入れることにした。現況が林・墓地・茶畠・荒れ地になっている場所が多くあり、遺物が確認できたのは畑地についてのみであったが、調査では弥生時代を中心として縄文時代から近世に至るまでの遺物が採集された。詳細は調査の概要の項で記述する。

文献的には、婦中町長沢の旧家である若林家に、天正以前の長沢地区の様子を記した『長沢各願寺絵図』が伝わっており、その中に千坊山遺跡も描かれていることが確認された。この古絵図についても、後の項で詳しく記述することにする。

測量

千坊山遺跡がある独立丘陵を東西南北で囲んでいる麓の道路までの12haを範囲として実施した。測量は、境界測量、地形測量、グリッド測量、トレンチ測量に分かれる。

境界測量は、発掘調査終了後に畠境等の土地の境界を復元する為のものである。まずは、測量対象地域内の土地所有者に、新町・羽根・長沢の地区別に説明会を開き、承諾を得た。また、測量の基となる境界杭を打つ際には土地所有者による現地立ち会いを行った。

地形測量は、まず事前の地形観察により人為的な起伏が認められる箇所を4箇所で確認した。このうち2箇所は平坦面で、一つは方形の塚状遺構、もう一つは塚状の低い高まりであった。それらの箇所については等高線を通常よりも細かく入れて、地形を特に詳細に表現するよう努めた。また、上記の地形測量は縮尺1/250で図化したが、方形の塚状遺構についてはそれとは別に、縮尺1/40で細部測量を行った。

グリッド測量は、調査に入る前に、記録作業に必要となるグリッド杭・BM杭をトレンチ近傍点に打った。

トレンチ測量は、調査完了後に、トレンチの位置と形を図化・測量を行った。

空中撮影

ヘリコプターによる空中撮影を2回行った。1回目は、



分布調査状況



測量作業状況

9月下旬に調査前の千坊山遺跡の遠景・近景を撮影した。2回目は、トレンチ掘削がある程度終わった11月中旬を行った。撮影前に遺構のラインを目立つようにマーキングして、遺跡全体の写真と遺構が集中する部分の局部的な写真を撮影した。

(2) 発掘調査

発掘の承諾が得られた土地については、事前に土地の利用状況を調べ、それを考慮に入れながらトレンチを入れる箇所を設定した。次に、試掘調査予定箇所にビニールテープを張り、その周辺の草刈りを行った。また、人為的な起伏が認められた4箇所については、見通しがきくように全域に草刈りを行った。

調査の手順は、掘削、遺構検出・マーキング、遺構発掘、写真撮影、実測の順に進めた。

掘削は、ほとんどを重機で行った。ただし、調査前の遺物探集状況から考えて、旧石器時代のものが分布する可能性がある箇所と、行人塚のマウンド上に設定した十文字のトレンチについては、手掘りで行った。トレンチはほとんど丘陵長軸に平行して設けたが、数カ所では直行にし、丘陵横断の土の堆積状況を確認した。トレンチの幅は基本的には2mで、遺構確認の為に拡張した箇所もある。掘削に際して重機の進入できる入り口は2箇所しかなく、北東の古里小学校側から進入し、西側の土砂採集跡より抜け出ることにした。機械掘削はまず、遺跡北東部の旧千坊山運動場の南側にある畑から始めた。ほとんどの畑には周囲に境界をあらわす茶木が植えてあり、その損傷を最小限にとどめるように、機械掘削をする順番や経路を十分に配慮しながら調査を進めた。今回の調査で掘削したトレンチ数はA地区75本、B地区12本、C地区38本（地区割りについては後に述べる）で、全部で125本を数える。

掘削後は、人力で表面を削って遺構を検出し、遺構のラインをマーキングして写真撮影をした。今回の調査は試掘調査を目的としているので遺構発掘はほとんど行っていないが、例外的に行入塚では、周溝の一部で断ち割りを行った。実測は平面図を縮尺1/100で、土層図を縮尺1/20で図化した。

調査の結果、弥生時代の遺構・遺物の分布状況は丘陵北半部に偏り、なかでも旧千坊山運動場とF地区に挟まれた



調査委員会風景



調査委員会現地視察風景



草刈り作業状況



トレンチ掘削作業状況

一帯で特に集中していることが分かった。当初の計画では旧運動場部分は既に削平されていると考え、調査対象外にしていたが、前述の調査結果から遺構・遺物の抜がりは運動場にまで及ぶと考えられた。また、周辺の土層や標高から考えると、一部は旧地形が残っている可能性もあった。このような状況をふまえて、急遽、旧運動場内に追加調査を行うことになった。その結果、東側の一部には、弥生時代末の遺構が残存していることが判明した。

尚、今回の調査では現況が林・墓地・茶畠となっている場所（D～H地区）については、ほとんど調査ができなかった。

調査委員会

発掘調査を推進するにあたって、千坊山遺跡発掘調査委員会を組織した。委員の構成は、学識経験者・関係行政機関の代表者・遺跡所在地の住民の代表者からなる。委員会の召集は2回行った。1回目は発掘調査前に開き、その時点までに行った作業の経過報告、トレンチの設定場所や調査方法の検討、現地の視察などを行った。そして2回目は発掘調査の中間報告をし、今後の調査の進め方を検討した。



トレンチ掘削作業状況



遺構・遺物確認作業状況

工程	年月 平成6年 4月	5	6	7	8	9	10	11	12	平成7年 1月	2	3
分 布 調 査	■											
草 割 り						■						
測 量				■ ■		■	■					
掘 削						■	■ ■	■				
遺 構 検 出							■ ■ ■					
遺 構 発 掘							■					
写 真 摄 影							■ ■ ■					
実 測								■ ■ ■				
埋 め 戻 し									■ ■			
委 員 会・地 元 見 学 会							■		■ ■	■ ■		
整 理・報 告 書 作 成									■ ■		■ ■ ■ ■	

表2 調査工程表

現地見学会

調査の成果がほぼ分かった段階で、現地見学会を2回催した。まず1回目は12月8日に、近くにある古里小学校の5・6年生92人を招き、午前と午後の2回に分けて行った。この小学校では、野外学習の場として千坊山遺跡のある丘陵を利用することが多く、過去に千坊山遺跡から採集した石器・繩文土器等の遺物を多く保管している。遺跡見学会は歴史学習の一環として実施し、子供達に身近な「考古学」に触れてもらう場となった。当日は、調査から分かった昔の人々の暮らしぶりを分かり易く解説し、子供達からは多くの質問を受けた。2回目は地元の方々を対象の中心にして、県内の考古学関係者にも呼びかけて開催した。12月11日の午前10時から約2時間のコースで設定し、当日は小雨にも関わらず約200人の参加者が集まった。この見学会では、資料の配布や出土品の展示等をしながら、調査目的の説明や現場をまわりながらの調査概要の説明を行った。

埋め戻し

12月中旬、実測が完了した地区から埋め戻しに入った。しかし、天候が不順で、途中からは積雪がひどくなったり、平成6年中に埋め戻しきを断念した。結果、平成6年度中に埋め戻しが完了したのは、調査区南半分とトレンチが深くそのまま放置すると危険だと考えられる旧千坊山運動場分で、残りは平成7年度に延期せざるを得なかった。

聞き取り調査

発掘作業員が主に地元の方々だった為、現地調査期間中の休憩時間に遺跡の昔の地形と土地の利用状況、そしてそれらの変貌などについて、聞き取りを行った。また地元の総代や役員の方々を召集して調査の中間報告と説明会を兼ねた聞き取りを行い、さらに報告書作成に入ってからも周辺の歴史に詳しい地元の方々から聞き取りをした。

遺跡のある地域は、公民館活動として地域の歴史や地名等を調査し、その結果を発表している〔1994古里公民館〕。そのため、千坊山遺跡の調査については、関係者の関心が高く、聞き取り調査に積極的に協力していただいた。

遺物整理・報告書作成

遺物の洗浄・注記までは、発掘調査期間中に現場事務所で済ませた。報告書作成は年明け1月より始めた。



土層確認作業状況



遺構実測作業状況



トレンチ調査完了状況（T36）



埋め戻し作業状況

(片岡・見波)

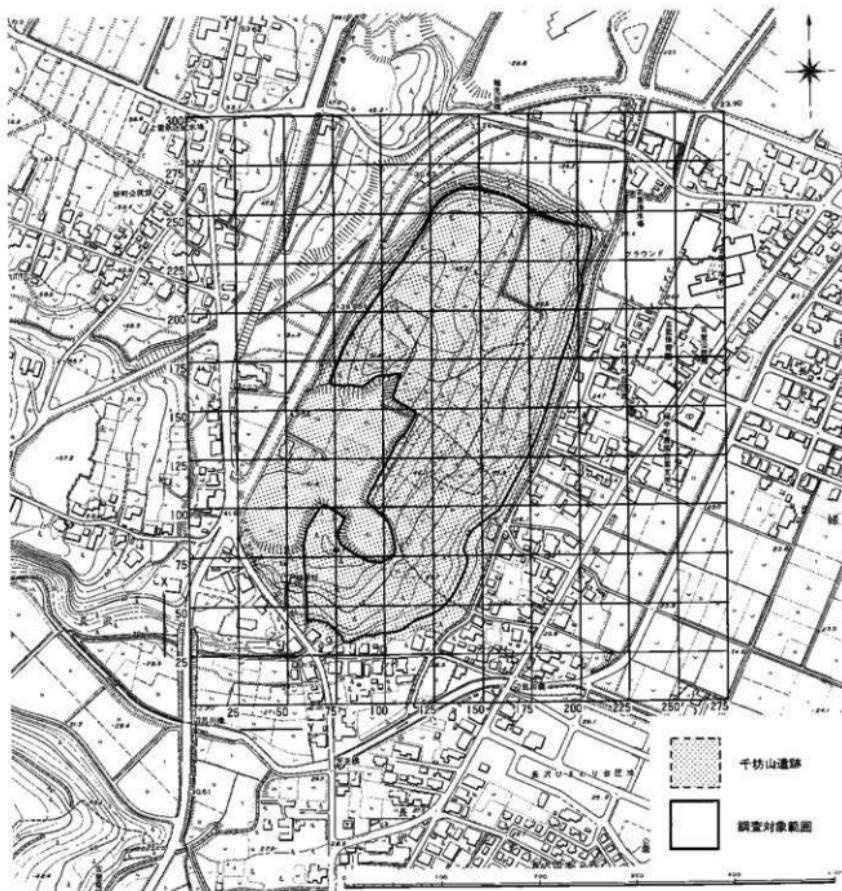
2 座標軸の設定と各地区の呼称（第3図）

国土地理院設定、第7座標系公共座標のうち、 $X = 72.00\text{km}$ ・ $Y = -3.64\text{km}$ の点を0原点として設定した。南北軸をX軸とし、 $X = 0$ から北方向に進むにつれて、X座標の数値が増える。同様に、東西軸はY軸とし、 $Y = 0$ から東方向に進むにつれてY座標の数値が増える。また、 $2 \times 2\text{m}$ の区画を1グリッドとした。

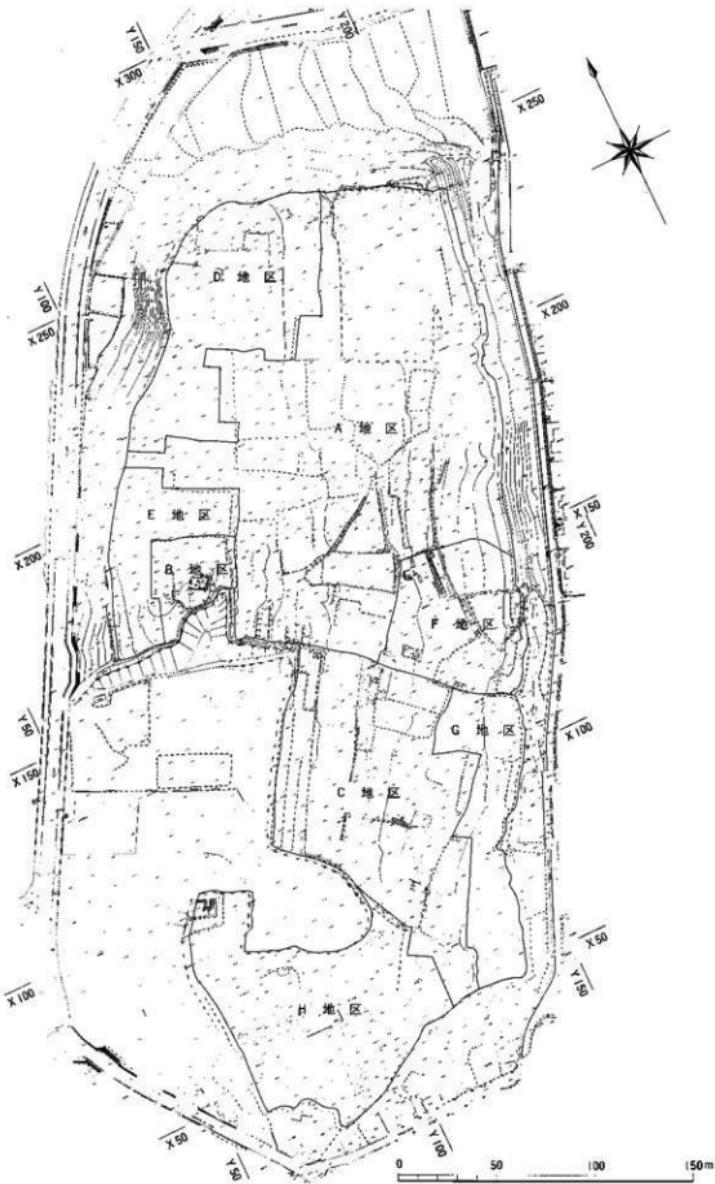
地区割りは報告書作成段階で便宜的に行ったものである。地割り方法は遺構や遺物の時代・性格や、今回調査をしたか否かなどにより、アルファベットでA～Hまでの8地区を設定した。今回調査をした箇所は北から順にA～C地区で、未調査地区は同じく北から順にD～H地区である。

尚、調査対象面積は追加調査分を含めると約72,000m²で、発掘面積は約 6,080m²となる。

(片岡)



第3図 地形及び区割図 (1/5,000)



第4図 地区割図 (1/2,500)

IV 調査の概要

1 事前調査

(1) 分布調査

①概況 (第5図)

発掘調査に先立ち、千坊山遺跡周辺の分布調査を行った。その結果、遺物の分布は遺跡北半部に集中してみられた。

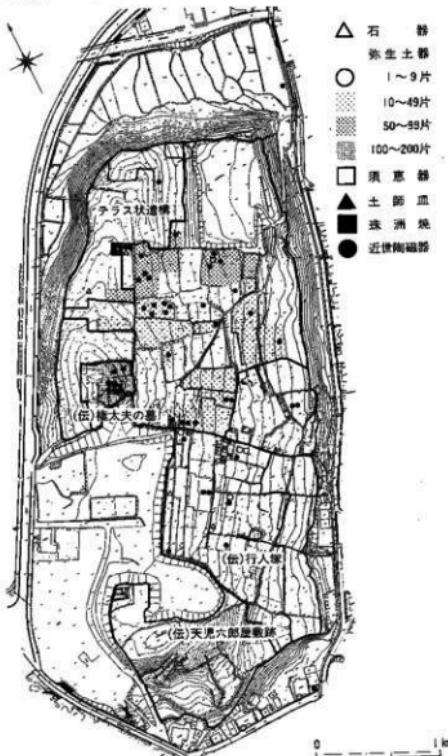
調査で採集した遺物は、弥生土器・須恵器・土師皿・珠洲・近世陶磁器・剝片・黒鉛があり、そのなかでは、弥生土器の割合が目立って高い。それぞれの分布状況については、弥生土器は、遺跡北半部のA地区・B地区に集中してみられた。特に大量に採集されたのが標高の最も高くなるB地区であり、次にA地区北部、A地区南部の順に集中して箇所がみられた。その他はC地区北部や、丘陵の南麓を削って造られた住宅敷地内で数片が採集された。これらは全て弥生時代末のものである。須恵器は、A地区北部と丘陵北麓の田にそれぞれ1片ずつが採集された。土師皿は、B地区に1片が見つかったのみであり、珠洲焼は、C地区北部と丘陵南麓の住宅敷地内でそれぞれ1片ずつが採集された。近世陶磁器は、遺跡北半部～中央部を中心として採集された。剝片・黒鉛は、疎らに散在する程度で、時期や用途の分かることは確認されなかった。

また、地形観察により、人為的に切り盛りされたと思われる起伏がB・C・D・Hの各地区に認められた。B地区については塚状の低い高まりを確認し、その二辺に五輪塔を並べているのが観察された。C地区には方形の塚状遺構があり、D地区には平坦面を確認した。またH地区においては少なくとも4面の平坦面が確認され、うち三辺には石積みを施しているのが観察された。

では、今回の分布調査結果と過去に採集された資料を合わせて、各地区的遺物散布状況をまとめる。まずA地区は弥生時代の遺物が集中する地域で、B地区は旧石器・縄文・弥生時代が混在する地域である。この両地区には近世陶磁器も多く散布し、千坊山遺跡における遺物の集中地帯となっている。次に、C地区は遺物の時代にバラエティーがあるが量的には少なかった。残りのD～H地区においては、遺物はほとんど採集されなかった。

②遺物 (第6・7図)

過去に採集されたものと今回の分布調査で採集されたものを載せた。総合すると遺物の年代は、旧石器時代から近世に至る。ただし、旧石器から縄文草創期の石器については西井龍儀氏・藤田富士夫氏によって既に報告されており【西井・藤田1976】、それについては後に再録することにした。よってこ



第5図 分布調査結果 (1994. 4.)

こでは未発表のもののみ扱う。

第6図は、過去に西井龍儀氏、亀田正夫氏により採集された遺物である。全てB地区から採集されている。

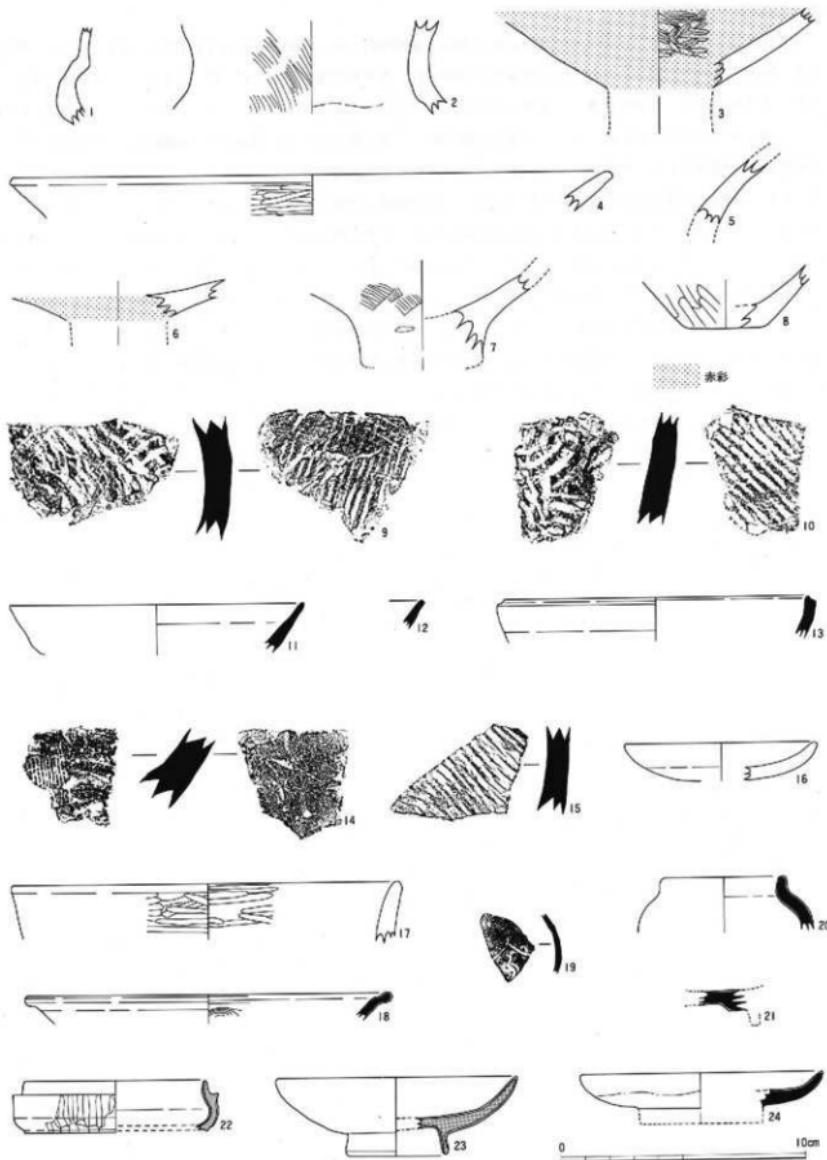
1・2・5～7は石鏃である。1・2・6・7は二等辺三角形で脚部は鋭角になる。5は抉り込みがカーブを描く。石材は1・5・6はハリ賀安山岩、2はチャート製、7は玉髓製である。3は磨製石斧で、蛇紋岩を使っている。4は滑石製の块状耳飾りである。8はチャート製のビエスエスキューである。9は縄文土器の深鉢で、中期後葉の串田新II式に比定される。外面は棒状工具で区画的に沈線を描き、その中にRLの縦文を施す。内面には浅い沈線を2条引く。10・11は古代土器である。内面には、当て具痕とハケ目、外面には平行タタキ目を残す。12は須恵器の壺である。内面に同心円の当て具痕、外面に平行叩き目を残す。13は土製のメンコで、片面に鶏の型が押してある。

第7図は、今回の分布調査で採集した遺物である。

1～8は弥生土器である。時期は弥生時代末である。1・2は壺の口頭部で、1は両面ヨコナブ、2は内外面にハケ目を残す。3～6は高杯で、内外面にヨコ方向のヘラミガキをし、3・6は赤彩を施す。7・8は底部で、外面にハケ目を残す。9～12は須恵器である。9・10は壺で内面に同心円の当て具痕、外面に平行叩き目を残す。11・12は杯で、口縁部・体部は外へ開く。13～15は珠渊焼である。13・14は片口鉢で、13は口縁部がやや内湾し、口唇部が凹む。珠渊I期にあたる。14は内面に細かいおろし目がある。15は甕脚部である。16は土師皿である。非ロクロで、口縁部をナデている。13世紀前半から14世紀前半にあたる。17は瓦器で、内外面にヘラミガキをする。18～24は近世以降の陶磁器である。19は急須で、「今」という字が工具で描かれている。20は越中瀬戸の小壺、22は合子、18・21・23・24は皿・小皿である。



第6図 遺物実測図 (1～8: 2/3, 9～13: 1/2) 1～4は西井龍儀氏採集資料、5～13は亀田正夫氏採集資料



第7図 遺物実測図 (1/2)

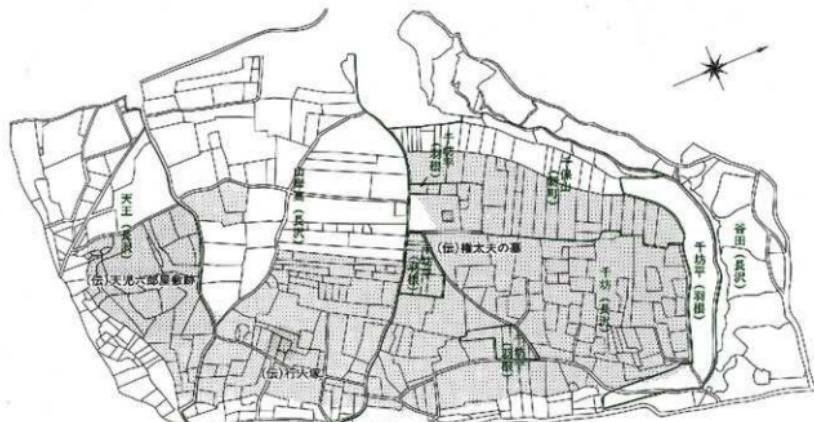
(2) 地籍図と古絵図の検討

千坊山遺跡は長沢・新町・羽根の3地区にまたがる。藩政時代これらの地区はそれぞれ独立した村であった。明治22年、町村制の施行に伴い、これらを含む8村が合併され、古里村が誕生した。その際、それまでの村名は大字となつた。古里村の名は、当地区に多くの遺跡や北畠山とも呼ばれた各願寺等があることから、「古くから開かれた村」という意で命名されたと言われている〔古里公民館1994〕。現在使われている遺跡周辺の地籍図は、昭和33年3月古里村作成の地籍図をもとに作られている。第8図は、昭和33年の地籍図を合成したものである。古里村は昭和34年には、町村合併により婦中町に吸収合併されている。千坊山遺跡が所在する地区的地名は、大字で3つ、小字で6つに分かれ。大字長沢の小字には谷田・千坊・山岸高・天王、大字新町の小字には千保山、大字羽根の小字には千坊平がある。このうち、小字・谷田はその名のごとく丘陵北側の谷部にあり、田が作付けされている。今回調査の対象としたのは、丘陵の平坦部分で、谷田を除く5つの小字の地区である。丘陵北半分の小字は全て千坊（千保）がつく。いいつたえによると千坊の名の由来は、その昔各願寺には数千の坊主がいたからとも、三千の宿坊があったからとも言われ、眞実は定かでない。山岸高は半分以上が土砂採集等で削平されている。天王は丘陵北側に位置し、眼下には長沢集落、正面には富崎城跡のある丘陵を望む場所にある。

ところで、千坊山遺跡は多くの伝承が残っている遺跡である。地元に残る言い伝えの他、長沢の旧家には周辺の歴史を描いた古絵図が代々受け継がれている。その古絵図は「天正年間・長沢各願寺絵図」と銘打たれているもので、若林宰氏が所蔵している。この古絵図については高瀬保氏が解説・考察〔高瀬1993〕を行っており、原稿を後に再録する事にする。

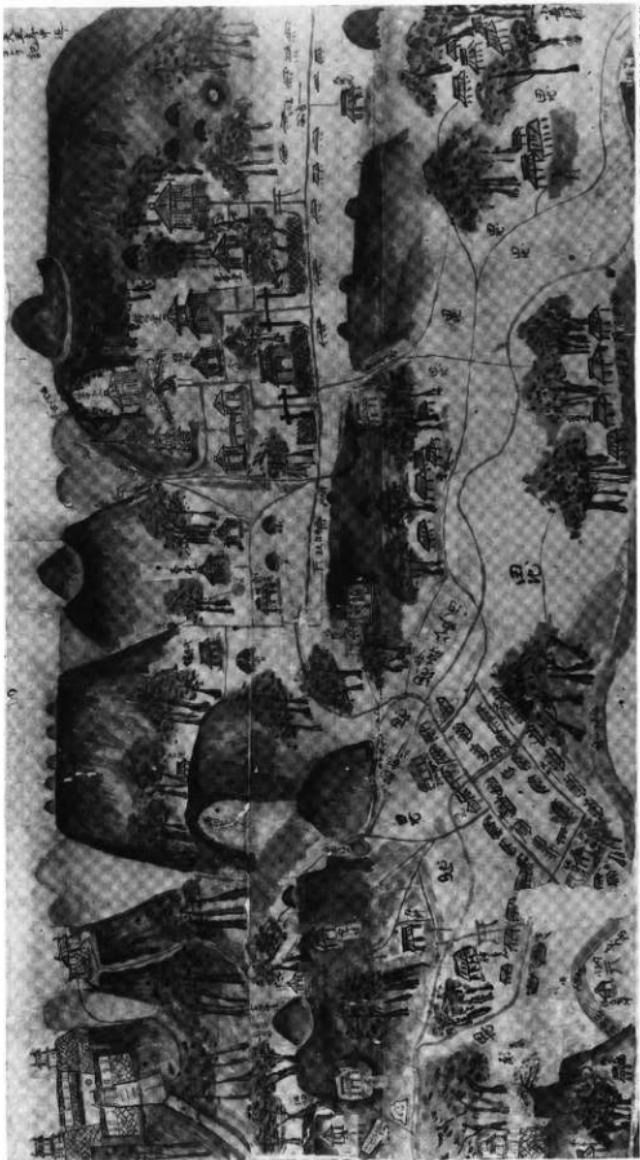
古絵図には、各願寺や王塚・勅使塚などの古墳や富崎城など、長沢を舞台に展開した各時代の象徴がイメージ豊かに描かれている。千坊山遺跡にあたる丘陵は絵図中央に描かれており、「寺号谷」は今の国道359号線にあたる。丘陵上にある註記には「堂千坊」「行人ツカ」「ツカ」「天児六郎元城カコイ内」「八幡宮」などがある。以下、これらの註記について、文献に記載されていたり、伝承として言い伝えられてきたことについて記述する。

丘陵中央部には2つの「ツカ」が描かれている。分布調査の結果、2つの塚あるいは塚状の高まりは、実際現地にも存在していた。しかし、聞き取り調査をしたところ、地元の言い伝えと古絵図の記述には、食い違いがみられた。



第8図 地籍図 文字は小字名、() は大字名

天正年間、長沢各廟寺社図 若林翠氏所藏



地元では、「行人ツカ」の場所にある塚状の高まりを山田権太夫の墓と呼び、東（絵図では下方）に書かれる「ツカ」を行人塚と呼んでいた。どちらが正しい呼称なのかは不明であるが、本書では地元の言い伝えに準ずる事にする。

「山田権太夫」

千坊山の東（絵図では下方）には「御田屋羽根村」があり、その付近にこの註記がみえる。山田権太夫は、寛永16～17年（1640年頃）の富山藩主・前田利次の臣下である。山田川と井田川の合流点にある羽根地区には、当時富山への船積み場があり、御旅屋が置かれていた。山田権太夫はそこに駐在していた宿場役人で、病死した後この地に埋葬されたとの言い伝えが残る。【古里公民館1994】

「行人塚」

行を積んだ僧侶の墓だというおぼろげな言い伝えはあるものの、築造した人物が果たして誰なのかは全く不明である。

「堂千坊」

丘陵北側（絵図では右側）にある。お堂のような施設があったとも考えられるが、言い伝え等は残っておらず、詳細は不明である。

「天児六郎元城カコイ内」

天児六郎という人物は、「肯構泉達録」に収録されている「六治古物語」にその名がみえる。「六治古物語」とは長沢の開祖である六治古の伝説で、3人の兄弟とともにこの地を開拓したといわれている。天児六郎は、六治古と龍女の間に生まれた息子として登場している。物語のなかでは、六郎はのちに武将となり長沢城を築いたとされている。ところで、古絵図で「天児六郎元城カコイ内」の註記のある場所は、丘陵北側の見晴らしの良い場所に位置している。分布調査の際に現地を確認したところ、ちょうどその場所に、南北方向に軸を合わせた平坦面が確認された。平坦面のうちの三辺には積み石が施されており、何らかの施設がここに存在していたことを示唆している。この人為的な地形と古絵図の註記には、どのような関係があるのか今後の調査が待たれる。

「八幡宮」

現在この註記の場所には、長沢稻荷社が建っている。この神社は、江戸時代からいくつもの神社を合祀したり改築したりしており、現在の稻荷社は平成6年に改築されたものである。このあたりの小字は天王であり、その昔、牛頭（ゴズ）天王を祀る八坂神社（別名天王社）があったことからその名がつけられたといわれる。

以上、古絵図については、そこに書かれているものをそのまま薦呑みにはできないが、調査をする際の参考とするには非常に良い資料になった。

③ 開発と地形の変化

遺跡の外周は、道路・宅地などによって少しづつ削平されている。著しい改変は北東部と南西部で見られる。

遺跡北東部は旧千坊山運動場建設によって、削平されている。運動場は、昭和2年8月に建設され、昭和6年に拡張された。その後、昭和40年9月、古里小学校に隣接して、新運動場が建設された。整地作業は陸上自衛隊の協力を得て行い、必要な土砂は旧千坊山運動場より搬出されている。試掘調査では運動場中央～西側部分に深い擾乱の跡を確認したが、それも下層にある疊を運動場の基盤にする為に掘り出した跡と考えられる。尚、運動場東部の一部（標高38.00～38.50mライン以下）は、旧地形の標高をとどめており、弥生時代の遺構が残存していた。

また遺跡南西部は、昭和45年頃に、民間会社による土砂採集によって削平されている。地元の方々によると、削平された場所の昔の地形は、現在最も標高の高いB地区からH地区まで、丘陵長軸に平行して尾根の稜線が通っていたという。その標高は、B地区より少し高いかもしくは同じくらいだったようだ。旧石器時代や縄文草創期のものが散布する場所はB地区に集中しており、続く稜線上にも同時期の遺物があった可能性がある。

（片岡）

2 発掘調査

(1) A地区

①概況（第16・17図）

調査区中で、遺構・遺物が最も多かった地区である。丘陵東斜面の中央～北側に位置する。標高は34～50mを測り、なだらかな斜面が続く。一帯の現況はほとんどが畠地だが、一部荒れ地がある他、中央部では杉がまとまって植林されている。また、北東部には旧千坊山運動場があり著しい改変を受けている。

当地区に設定したトレンチの本数は計75本である。トレンチのほとんどは丘陵に平行して設けたが、土の堆積を見るに數カ所では直行して設けた。トレンチの設定は、掘削の経路を考慮し、いくつかのブロックに分けて進めた。まずは、旧運動場南方から掘削を開始し、西側方向にT 1～30までを設けた。次に、斜面を東側に降り、標高の低い一帯でT 31～44までを設けた。C地区終了後には南側中央部分にT 81～86を、さらにB地区終了後には南西部部分にT 95～108を設定した。A地区では、弥生時代の遺構・遺物がほぼ全域に分布していた。なかでも最も集中していたのは旧千坊山運動場とF地区に挟まれた一帯であり、分布は旧運動場にも抵がる可能性があった。そのため、西方の斜面にT 109～110を、旧運動場内にT 116～124を設定し、追加調査を行った。その結果、東側中央部を中心として擾乱を逃れた箇所があり、弥生時代の遺構が残存していた。

トレンチのうち数カ所は拡張して遺構の拡がりを確認した。遺構遺存状況は場所によって異なるが概ね良好である。

②層序（第9図）

当地区的基本層位は、上から順に1層：黒褐色シルト（表土）、2a層：黒褐色シルト（弥生時代末の遺物包含層）、3層：にぶい黄褐色シルト（漸移層）、4層：黄褐色粘質土（地山）である。2a層は純粹な遺物包含層ではなく、後世になって手が触れているものと考えられる。弥生時代の遺構については、本来の遺構上面が削平されている可能性がある。現況では2a層以下の2b層から掘り込みがみられるようだが、当地区ではこの2層の区別が不明確だったため、遺構確認面は3層直上であった。遺構確認面までの深さは5～70cmと場所によってかなり差があるが、概して東側は浅めで西側は深めである。また東側・西側とともに斜面がきつくなるあたりで深くなっている。

③遺構（第16・17図）

調査によって確認した主な遺構は、弥生末の竪穴住居跡22棟、土坑、溝である。

a. 弥生時代の遺構

竪穴住居跡 検出した22棟のうち平面形全面を確認したのは4棟のみである。規模等が明確に分かるものは少ないが、住居跡は大きくは円形と（隅丸）長方形の2つに分類できる。また、後者は規模によりさらに細分される。Aタイプは円形を呈する。直径8～11.5mを測る大型の住居跡。確認したのは3棟（S I 04・06・15）のみで、A地区全体の約14%である。最も大きい住居跡はS I 04で、直径11.5mを測る。一方、Bタイプは（隅丸）長方形を呈する。中型（長軸8～9m・短軸7～8m）のB 1タイプ、小型（長軸5～6.5m・短軸4～5m）のB 2タイプに分かれ、全部で18棟を数える。B 1タイプ（S I 01・05・09・12・14）が5棟で、A地区全体の約23%を占める。B 2タイプ（S I 02・03・07・08・11・17・18・21・25）が9棟で約41%を占める。切り合ひ関係があるのはS I 04・11の2棟のみで、S I 04はS I 11に切られる。S I 11からは周囲を囲うように石や粘土塊が検出された。住居跡からは弥生時代末（月影段階）の土器が出土する。S I 07・12からは縄文土器・黒曜石の剝片も出土したが、混じり混みであろう。

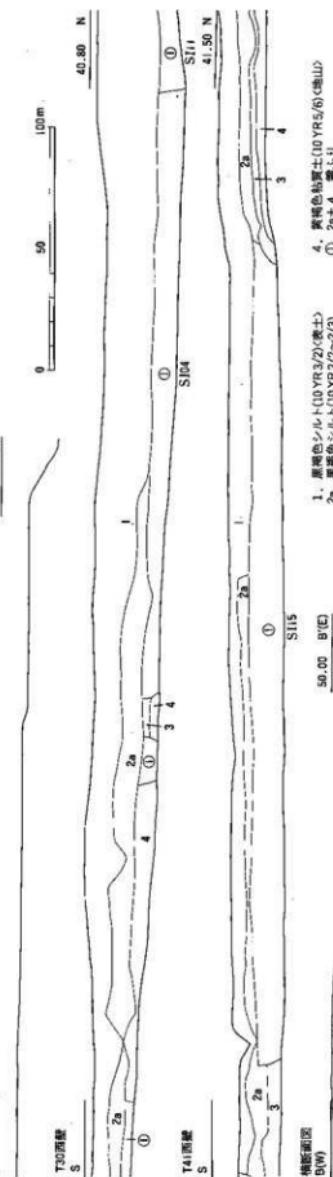
土坑 S K 01・03・07・08・09・10・20からは弥生時代末の土器が出土した。うちT 36のS K 09は径1.2mの円形を呈する土坑で、覆土に焼土ブロックや炭化物が混じる。付近にはS I 12・13がある。

その他 S X 01はT 35にあり、調査区東端の崖ぎわに位置する。方形あるいは「コ」の字状に区画された溝で、北側は溝が2重になっている。規模は内側の溝で測ると6.8m、2重目の溝まで含めると9mを測る。溝の幅は0.6～1

横断面図

A(S)

50.00 K(N)



横断面図

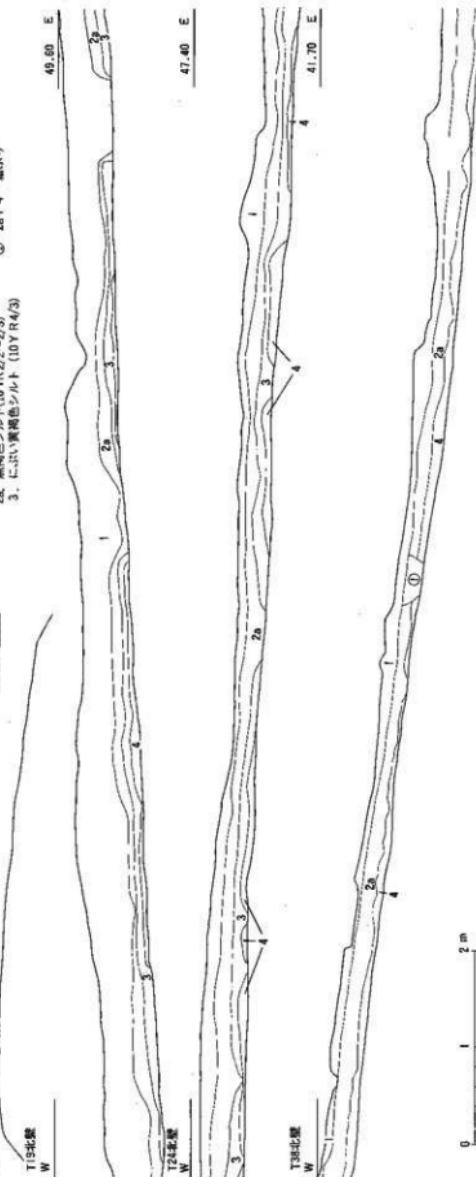
B(W)

50.00 B(E)



横断面図

C(W)



第9図 A地区 土層断面図 (土層図:1/50、他は1/1,000)

mである。トレンチ東壁ぎわには土坑があり、2 b層が堆積する。溝には区画や水切りなどの目的があったと考えられるが、今回の調査では性格は判然としなかった。また、SX02はT35にあり、SX01の南方に位置する。近世以降の溝によって切られている。南に行くと東方に曲がっていくようだが、ところどころに跡が隆起しており不明確である。南東隅には縄文土器・弥生土器が出土している。

b. 中世の遺構

溝 SD03はT32Bの南端にある。幅0.4mで南北に伸びる。覆土には粗めの地山ブロックが混じる。ほぼ完形の土師皿が2枚出土した。A地区にはSD03と同じような覆土の溝が幾条かあるが、現代の痕跡もほぼ同様の覆土であり、中世のものかどうかは判断したい。

c. その他の遺構

T2のSD01・02、T33のSK05・06からは縄文土器が出土したが混じり込みであろう。SK11・12は焼壁土坑である。前者はT25の南西隅にある。後者はT100にあり近世以降の溝に切られる。径約90cmで覆土に炭化物が含まれる。

④遺物（第20・21図）

出土した遺物には弥生土器・縄文土器・中世土師皿・黒曜石剝片がある。今回は試掘調査なので、遺構確認面に出土していた遺物と表記遺物に設定される。その為復元可能なものは少なく、T30から出土した5点にとどまる。

a. 弥生時代の遺物

出土土器の時期は弥生時代末（月影I・II式期）である。土器は壺・壺・高杯・器台・蓋・匙の各器種ごとに図示した。復元可能なものは極めて少なく、口縁部・底部等の形態が明らかなものを図示した。各々の分類は、口縁部や脚部の形態などから便宜的に行なったものである。

壺（第20図 1～13）

壺A 複合口縁をもつ壺。

A1 (2・8) やや外反して立ち上がる幅の狭い複合口縁をもつ。2は球形の胴部で底は平底である。8は小型の壺である。

A2 (3) 幅の広い複合口縁をもち、頸部は長くやや開く。

A3 (5・6) 直立もしくはやや外反する、幅の広い複合口縁をもつ。

A4 (4・9・10) 逆「ハ」の字状に外反する、幅の広い複合口縁をもつ。口縁部から頸部への屈曲があまり明瞭でない。頸部が短かめのもの（4・9）と頸部が長く直立ぎみのもの（10）がある。

壺B (1・7・11・13) 口縁部が逆「ハ」の字状に外反するものの、直線的に外反するもの（1・13）と屈曲の強いもの（7・11）がある。1は球形の胴部で底は丸底である。頸部と胴部の境に凹線文をめぐらす。

壺C (12) いわゆる細長頸壺である。頸部はやや外反して直線的に立ち上がり、頸部と胴部の境に凸帶をめぐらす。

壺は、総じて、口縁部は内外面ともにヨコナデあるいはヘラミガキ（内外面ヨコ方向）のものが多い。胴部は全ての土器がヘラミガキ（内外面ヨコ方向）あるいはハケ目（外面タテ・ヨコ両方向、内面ヨコ方向）を施している。また頸部と胴部の境をヘラケズリするものもある。赤彩痕のあるのは1・2・4・7・12である。5点ともに外側はほぼ全面に、内面は口縁部・口頭部のみに塗色している。

甕（第20図 14～34）

甕A 複合口縁に擬凹線文をもつもの。

A1 (16・17・18・19・25) 外反する、幅の広い複合口縁をもつ。18・19は大きめの器形で、19は口縁内面に指押さえ痕がある。25は口縁部から頸部への屈曲があまり明確でない。

A2 (21・26・30・31) 口縁部がほぼ直立する。26以外は幅の広い複合口縁をもつ。

A3 (14・22・23・27・34) 口縁部がやや内反りする。14・23・27は口縁部下端が肥厚気味で、22は口縁部から頸部への屈曲があまり明確でない。34は大型の壺で、口縁部を凹線文風にする。

壺B 複合口縁が無文のもの。

B1 (20・24・28) 口縁部が外反する。20は逆「ハ」の字状に外反し、口縁部から頸部への屈曲があまり明瞭でない。24は幅の広い複合口縁を、28は幅の狭い複合口縁をもつ。

B2 (15・29) ほぼ直立する、幅の広い複合口縁をもつ。29は口径が脚部の最大径を越え、鉢に似た器形をする。

壺C (32・33) 口縁部が「く」の字状に外反するもの。屈曲はゆるやかで、口唇部を面取りする。

壺は、口縁内面はヨコナデ、外面はヨコナデもしくは擬四線文を施す。頸部はヘラケズリ（ほとんど内面に行う）をし、脚部内外面はナデもしくはハケ目を残す。

高杯 (第21図 1・7~16) 杯部と脚部が揃うのは1個体のみなので、杯部と脚部はそれぞれ別に分類を行った。

高杯A 外反する複合口縁をもつもの。

A1 (1・8・10) 杯部底部側が大きく、複合口縁の幅が狭い。1は口縁端部が肥厚し、面取りをする。

A2 (7・9) 杯部底部側が小さく、複合口縁の幅が広く逆「ハ」の字状に開く。

高杯B (11) 丸みのある皿状の杯部をもつ。口縁部外面に細い凸帯をめぐらす。

高杯a 円筒状の脚柱と「ハ」の字状に開く脚台をもつもの。

a1 (1・12・14・15) 脚柱が短い。15は外面に赤彩を施す。

a2 (16) 脚柱が長く棒状に伸びる。

高杯b (13) 脚部が杯部との境から逆「ハ」の字状に開く。

高杯の杯部は内面はヨコ方向、外面はタテ・ヨコ両方向のヘラミガキをするものがほとんどである。脚部は内面はタテ方向のヘラケズリ、外面はタテ方向のヘラミガキとハケ目が多い。

器台 (第21図 2~6)

器台A (3・4) 逆「ハ」の字状に開く皿状の受部をもつもの。3は太い脚部をもつ。4はやや浅い受部で、平らな口唇部は面をなしている。

器台B (2・5・6) 受部に外反する複合口縁をもつもの。2は小型の器台で、装飾性が強く内外面に赤彩を施す。また杯部には4条の沈線と刻み目を施し、脚部には円孔を3箇所に2対ずつ穿つ。5・6は口縁部に擬四線文をもつ。

器台の杯部は外表面ヘラミガキで、脚部は外表面ヘラケズリまたはヘラミガキ、内面ハケ目またはヘラケズリをする。

鉢 (第21図 17) 口縁部が内湾する。内面はヘラミガキ、外表面はナデを行く。

壺 (第21図 18~19) どちらもつまみ部が環状になる。18は直線的に開き、つまみ部が大きい。19はやや内湾して開き、つまみ部は小さい。つまみ部はナデ、あとは外表面ヘラミガキやヘラケズリを行うが、内面は磨滅している。

匙 (第21図 20) 外表面はハケ目とヘラミガキ、内面はナデする。赤彩を施す。

底部 (第21図 21~31) 24は小壺の底部で、赤彩を施す。壺・壺の内面はハケ目やヘラケズリをしている。底面はヘラケズリするものが多いが、葉脈状の25、工具で沈線を入れる28がある。30・31は台付で、どちらも外反して開いている。内面はナデ、外表面はナデやヘラミガキを施す。

b. 繩文時代の遺物

第21図の32~37は繩文土器である。32・33は前期末葉の朝日下層式に比定できる。32は口唇部に繩文原体を押圧している。また脚部には結節状の繩文を施している。33は口縁部に細半截竹管文を、また下部には木目状撚糸文を施す。35は波状口縁をもつ深鉢で、山形の波頂部に沈線を施す。後期末の八日市新保式に比定される。36は深鉢脚部でRLの繩文を施す。34・37は深鉢の底部である。黒曜石の剝片2点がT32BのS107より出土している。

c. 中世の遺物

第21図の38~40は土師皿である。38は体部がゆるく外反し、口縁部をナデる。口径は9.5cmを測る。39・40はともに口径が7.5cmである。39は丸底で、器形がゆがんでいる。40は器壁が厚く、浅い。とともに、SD03から出土した。全て非クロロで、時期は13世紀後半から14世紀前半にあたる。

⑤小結

A地区では、ほぼ全城に弥生時代末の遺構・遺物が散布していた。最も住居跡が集中するのは、旧運動場とF地区に挟まれた一帯で、13棟が確認されている。分布状況から考えると、旧運動場の削平された部分にも当然何棟かあったものと思われ、住居のまとまりはさらに北方に広がっていたと考え得る。また、西側にも5棟が集中して分布し、B地区的住居跡とまとまりをみせている。弥生時代の一般的な構成は竪穴住居・倉庫・墓から成るが、今回確認したのはこのうちの竪穴住居跡のみであった。

縄文時代の遺構は確認できなかったが、遺物の分布地域は、弥生時代の住居跡と同じく、旧運動場とF地区に挟まれた一帯に限られた。

中世の遺構は溝が検出されたのみで、実態は明らかでない。(片岡)

(2) B地区

①概況(第11・17図)

丘陵西側の尾根上に位置する。調査区内で最も標高の高い場所にあたり、最高で51.95mを測る。南側は土砂採集により削平されている。

当地区に設定したトレンチの本数は計12本(T87~94)である。そのうちT87・89・91~93は、隣接する2棟の竪穴住居跡の形態を確認するため、拡張したものである。T111~114の設定箇所には旧石器時代のものが存在する可能性があったので手掘りによる掘削作業を行った。確認された遺構・遺物の分布は中央から東側に偏る。遺構は弥生時代の竪穴住居跡のみで、遺物は弥生時代末の土器を中心に、縄文時代の土器・石器などである。

②層序(第10図)

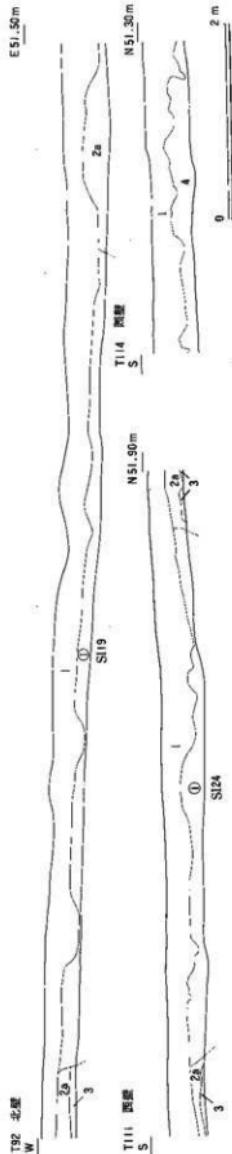
当地区の基本層位は上から順に、1層：黒褐色シルト(表土)、2a層：黒褐色シルト(弥生時代末の遺物包含層)、3層：にぶい黄褐色シルト(漸移層)、4層：黄褐色粘質土(地山)である。弥生時代の遺構については、本来の遺構上面が削平されている可能性がある。遺構確認面は3層直上であり、その深さは中央部から東側では20~50cmを測る。西側は20~30cmと浅めで、植林等によって地山直上まで搅乱を受けているところも多い。

③遺構(第17図)

弥生時代の竪穴住居跡が3棟確認されている。S119はAタイプで、S120はB2タイプである。S124は検出部分が少ないので形状は分からなかった。

④遺物(第22図)

出土した遺物には弥生土器、石器、縄文土器、近世陶磁器がある。



第10図 B地区土層断面図 (1/50)

a. 弥生時代の遺物（1～12）

弥生土器には、壺・甕・高杯・鉢・蓋の各器種がある。以下、A地区の分類に従い記述する。

壺（1・2） 1は口縁部が逆「ハ」の字状に外反し、外面は頸部との境に段をなす。頸部は長く直立ぎみで、壺D種にあたる。2は口縁部が逆「ハ」の字状に強く外反し、壺E種にあたる。口縁部・頸部は内外面ともにヨコナデもしくはハケ目を残すものが多い。

甕（3～8） 5は甕A2種で、ほぼ直立する幅の狭い複合口

縁をもつ。3・6は甕B1種で、口縁部が外反する幅の狭い複合口縁をもつ。4は甕B2種で、ほぼ直立する幅の広い複合口縁をもつ。肩部に指押さえ痕がある。8は甕C種で、口唇部を面取りする。口縁内面はヨコナデ、外面はヨコナデもしくは擬凹線文を施す。胴部内外面はハケ目もしくはナデである。肩部をヘラケズリするものがある。

高杯（9） A2種で、内外面にヘラミガキを行う。

鉢（10） 口縁部が内湾する。内面はナデを行う。

蓋（11） 直線的に開く。つまみ部は円形に大きく引き出されている。つまみ部はナデ、あとは内面にヘラケズリ、外面にヘラミガキをする。

底部（12） 内面をヘラケズリをする。

b. 旧石器～繩文時代の遺物

13～16は石器である。13・14はサスカイト系の安山岩を使用する。13は横削ぎの羽状剝片で、旧石器時代あるいは繩文時代草創期のものである。14は13などの剝片を取ったあととの石核であろう。とともにS I 24上層の擾乱層から出土した。15～16は、（伝）椎太夫の墓周辺の石を集めて、まとめてあったものの中に混じっていた。15は砂岩製の叩き石である。使用により両端が平らになっている。16は安山岩系の石材を使った打製石斧である。側面を敲打している。17～18は繩文土器である。R Lの繩文を施す深鉢の胴部で、17はさらに沈線を施している。

c. その他の遺物

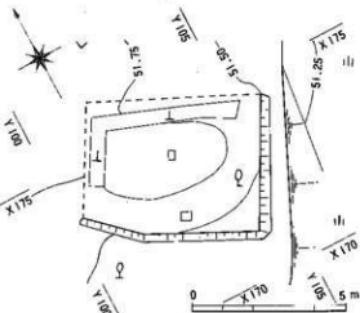
19～21は近世以降の陶磁器である。

⑤小結

調査前に採集したものと、B地区には旧石器・繩文・弥生・古代・中世の各時代の遺物が見つかっている。しかし、弥生時代を除いては遺構に伴う遺物ではなく、その時代にそこでどのような営みがあったのかは判然としない。特にこの地区では、調査前から旧石器時代のもの的存在を推測していたのだが、今回は地権者の希望や時間的制約で調査箇所が限定されたこともあり、当時期と断定できるものは見つからなかった。

当地区には地元で「山田椎太夫の墓」と伝えられる塚状の高まりがある。分布調査では、この場所から大量の弥生土器が採集されている。おそらく、弥生時代の堅穴住居跡の上に、後世になって墓が築かれたものと思われる。また、方形の盛り土の2辺にはたくさんの中空の石造物が並べられている。石造物の種類には五輪塔、宝篋印塔、板石塔婆、石仏、無縫塔等があり、なかには中世にさかのぼるものもある。これらの石造物は、昭和になってから羽根にある神宗の無門寺から移されてきたもので、組み合わせが違っていたり、天地が逆になっていたりする。禅寺から移されてきたためか、僧侶の墓、ことに禪僧の墓に多い無縫塔も多くある。椎太夫の墓石とされる石碑もあるが、今回は解説や拓本まで手を伸ばせなかった。石造物の時期の検討も含め、今後の課題である。

（片岡）



第11図 （伝）椎太夫の墓平面図 (1/250)

(3) C地区

①概況（第18図）

丘陵東斜面の中央～南側に位置する。標高は、35～47mを測り、比較的なだらかな斜面が続く。一帯の現況は、ほとんどが畠地だが、東側には杉林・竹林・荒れ地がある。なお、西方は土砂採集によって大きく削平されている。

当該地区に設定したトレンチの本数は計38本である。西方の標高の高い場所から、東方の低い場所へと順に掘削を進めた。T45～57・T74～80・T106は、（伝）行人塚より標高の高いB地区西側に設けた。T58～65は（伝）行人塚の遺存状況を確かめるために設定した。T61とT63、T62とT64をつなぐ十文字のトレンチは、マウンドの中心部を通すように設定した。この部分については土層観察をしながら、手掘りで慎重に掘削作業を行い、内部施設の有無の確認を行った。

また、今回は試掘を中心とする調査ではあるが、T62～65については例外的に溝底面まで掘り上げ、溝の深さや覆土や遺物の有無の状態などを確認した。T66～73は、（伝）行人塚より標高の低いB地区東側に、見通しの悪い林の間をねって設置した。

当該地区的遺構・遺物は、行人塚周辺以外にはほとんどなく、丘陵北半部と比べると極端に少ない。

②層序（第18図）

当該地区的基本層位は、上から順に1層：黒褐色シルト（表土）、2a層：黒褐色シルト（弥生時代末の遺物包含層）、3層：にぶい黄褐色シルト（漸移層）、4層：黄褐色粘質土（地山）である。

遺構検出面までの深さは東南部・北西部・中央部の順に深い。

北西部はB地区では標高の高い場所にあり、西側は土砂採集の削平箇所に接する。遺構検出面までの深さは、20～50cmである。

中央部における遺構検出面までの深さは、5～35cmと非常に浅い。

東南部はB地区では標高の低い場所にあり、林の間をねってトレンチを設定した。遺構検出面までの深さは、20～60cmである。場所によってかなり差があるが、全体的に深い。竹の根が這うなどして、ほとんどが擾乱を受けている。

B地区では畑作の影響か、2a層・3層が無く表土直下に地山がある場所が多い。

（片岡）

③遺構（第12・13・18・19図、図版10～14）

塚状遺構1・穴1と他に近世以降の耕作に伴うとみられる溝・小穴などを確認した。

塚状遺構（第12・13・19図、図版10～14）

前述の古絵図とは位置が異なるが、地元では“行人塚”と呼称されるものである。

現況 杉林の一角に高さ1m前後の方形の高まりが、約10m×約8mの範囲で続く。南西隅から西に伸びた細長い高まりが見られるが、調査の結果烟突のようだ。塚の頂部は、一帯の地形が東に緩く傾斜するのに反し、ほぼ水平をもつため、東側ほど裾部との比高差が強くなる。塚の南側及び西側は、後世の切り土により削平を受ける。特に南側では、かなりの幅で高まりが削られたものらしく急激な法面となる。遺存状況としては、東から北側にかけての部分にもの形を残すものと見られた。

塚の調査は、マウンドを十文字に断ち割る形でトレンチを設定し、周溝が確認された時点でコーナーや周溝の状況確認のため拡張区・補足トレンチを設けた。（伝）行人塚の調査に係るトレンチは、No59～65の計7本がこれに当たる。

規模 塚の形態は、方形のマウンドの回りに二重の周溝を巡らすものと見られる（第19図）。残存するマウンド頂部で東西約8m・南北約6m、樋巡りで東西約10m・南北約8mを測る。もとは、前者が一辺約9.5m・後者が一辺約12mの正方形をなしたものと考えられる。法面の高さは、東側ほど高く角度もきつい。塚の主軸は、南東にとるものと思われ、対角線上が方位にのるタイプである。

マウンドの盛土は、回りに溝を四角く掘った後、基盤層として2b層（黒褐色シルト）をそのまま用い、その上に黒褐色シルトと橙色シルトが混じた交互層（⑦～⑥層）を40～60cm・橙色シルト（⑤・⑥層）を20～40cm・黒褐色シルト（表土）を15～30cmの順で盛り上げて盛土としている（第13図）。基盤となる2b層は、頂部の水平をもつためか西側ほど薄く、整地を受けているようだ。2b層自身、他の地区には認められなかった土層で、本来の自然堆積層位と考えられる。この2b層及び⑦～⑥層の黒褐色シルトには、弥生時代末の土器片が混じった。

裾部及び法面のしまいは、マウンド盛土の後、法面にそわせてにぶい黄橙色シルト（③層）・円礫が混じる褐色シルト（②層）の順で盛土する。もとは、四面が古墳の墓石状を呈したものと推察される（第12図）。この②層及び内側の周溝覆土上部に中世の珠洲焼・土器片がわずかに混在する事から、当遺構の年代を知る手がかりとなっている。

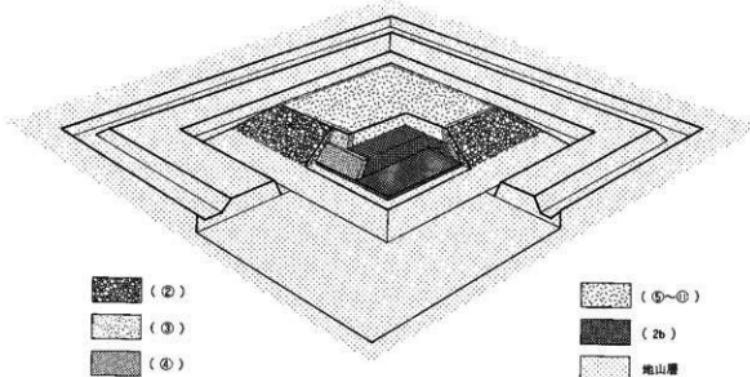
なお、法面に使用された円礫は、当地で調査したものか量的に見て疑問が残る。確かに付近の地山層以下には砂礫層には存在するものの、人頭大以上の礫が混在する事や各周溝の掘込みがその砂礫層までに至っていることが少ない事が挙げられる。

周溝は、内側のもので上幅約1.8m・下幅約80cm・地山上面からの深さが約70cmを測る。65トレンチを見るかぎり各隅は直角に近い形で巡るようだ。また、外側の周溝は、上幅約2m・下幅約80cm・地山上面からの深さが20～60cmを測り、西側にあがるほど浅い。周溝全体の規模は、外側周溝の外端で南東～北西約25m・南西～北東26mで溝約1本分前者が短くなっている。内側と外側の周溝との間隔が南東側だけが狭く掘込まれているため正面性を意識した配置と思われる。

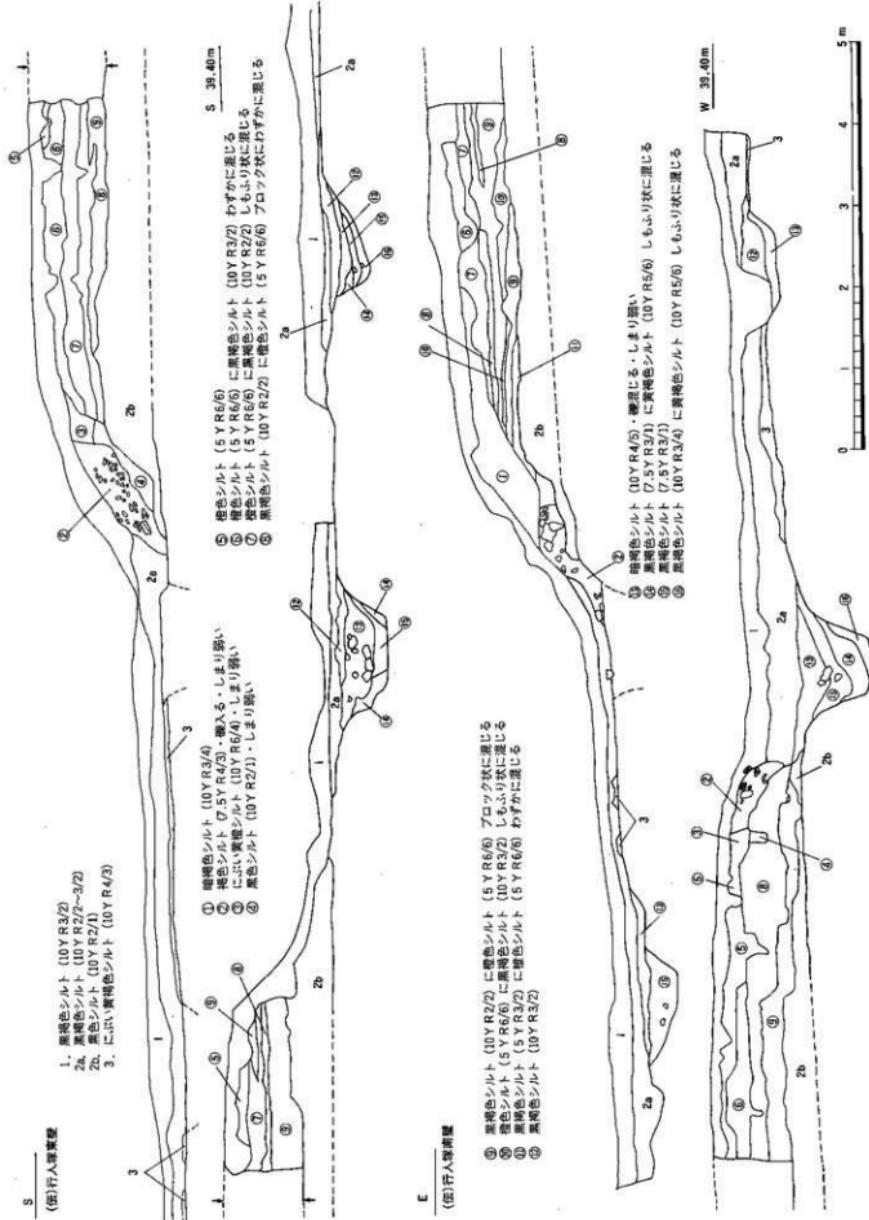
周溝部の基本層序は、厚さに多少のバラツキがあるものの、概ね5層に分割される（第13図）。内側周溝に見られる①層は法面の崩れにゆらいするもので多数の礫が含まれる。下面が底近くまで達している箇所もあり、法面の崩壊が初期の段階で起きた可能性ともみてとれる。

その他の施設 今回の調査では、いわゆる主体部となる施設は確認されていない。ただ、62トレンチの裾部から法に当たる部分で、円礫を敷き並べたような箇所が検出された（第19図・図版12の1）。ある程度の区画性をもつようで、明らかに法面の石積みとは異質に感じられた。付近の土層観察でもマウンドの盛土が、その箇所だけ切り込まれており、他に見られない暗褐色シルト層（①層）が入った。位置的にも、先に述べた南東側の正面部に当たり、何らかの施設が配されたものと考えて相違ないと思われる。

性格 当遺構の年代は、わずかに出土した珠洲焼・中世土器片から13世紀後半～14世紀前半に當てられるもの



第12図 (伝)行人塚構築模式図 () 内の数字 土層図と符合



第13図 (伝)行入塚土層断面図 (1/60)

性格となると、判然としない。大きさ・四面石葺きの法面・二重の周溝をもつ調査例は、今のところ県下にはない。性格としては、いわゆる塚・墓または、ある種の塔の基壇・社の基壇などが挙げられるが、必要な施設や付近に関連する遺構が確認されず、それぞれ決め手に欠ける。これは、今回の調査範囲の限界ともみてとれ、今後、付近一帯を含めた詳細な調査の必要性を述べここでは、積極的な記述をさけその継続調査に期待する。

S K15穴及びその他の遺構（第18図）

77トレンチでSK15穴を、47・50・51・106・115トレンチにかけて溝状の遺構を確認した。前者は、直径が60cm前後の穴で、黒褐色シルトの覆土が認められた。後者は、幅が1～2m程でほぼ東西方向に伸びた。覆土は、表土と大差なくやや褐色をおびたシルトで覆われた。いずれも、出土遺物はない。

④遺物（第22図22～29、図版20の1）

遺物は、いずれも（伝）行人塚及びその周囲の出土に限られた。

量は、整理箱1箱にも満たない。内容は、縄文時代の石器・弥生土器・中世陶器・土師器及び平安時代と思われる須恵器・杯身の小片がある。

22～23の壺は塚の盛土、24の壺は63トレンチ2a層出土のもので、弥生時代後期後半～末期にあてられる。

25・26は、いずれも塚やトレンチの表土内出土である。擦形に近い縄文時代の打製石斧で、25の抉り部には敲打の調整がなされている。縄文時代の遺物としては単独出土であるが、これまでの表探資料の中に中期の土器が見られることから同期に属する可能性が強い。

27～29は、全て（伝）行人塚に係わる出土遺物である。27の株洲焼は、中型の壺の頸部片。28は同じく大型の壺の頸部から底部にかけての破片である。外面に見られる叩き目は、いずれも細かい。頸部の形態や叩きの状態から株洲III～IV期にはいると考えられる。29は、いわゆる土師質小皿で、残りが悪いロクロ成形のものと思われる。形態からみて、株洲焼の時期と同じく13世紀後半から14世紀前半代にあてられる。

これらの出土状況としては、27と29が63トレンチの内側周溝覆土内出土、28の1・3が62トレンチの盛土肩部②・⑥層内出土。27の3及び28の2は、接合資料で、前者が62トレンチの盛土⑤層内出土のものと、64トレンチの盛土肩部②層内出土のものが接合。後者が63トレンチの内側周溝覆土内出土のものと、同トレンチの盛土肩部⑤層内出土のものが接合する。少なくとも壺2個体分の破片が塚に係わり散発的に出土したことになる。これらが即、外容器と考えるにはその出土状況からして無理があるようだ。

⑤小結

C地区は、発掘前の分布調査では弥生土器・須恵器・株洲焼などが採集された箇所である（第5図）。しかし、発掘結果は、A・B地区で確認された弥生集落の延びは認められず、確かな遺構としては（伝）行人塚部分の確認にとどまった。これは、地区一帯の耕作や整地による削平の影響が大きいものと推察される。事実、行人塚の基盤層となる2b層（黒褐色シルト）には、かなりの弥生土器が含まれていた。A・B地区的発掘結果にあれば、同層位に弥生遺物のまとまった箇所が存在すれば以下には確実に遺構が伴っており、この点を踏まえれば付近一帯にも同様な遺構が遺存するとみてよかろう。

唯つ確かな遺構として確認できた（伝）行人塚は、二重の周溝を巡らし、四面葺き石のマウンドをもつ壮大で丁重な作りをしたものである。その年代は、伴出遺物により13世紀後半から14世紀前半代の築造とおさえられる。ただ、遺構の年代・規模・遺存状況などは、今回の調査によって判明したもの、その性格については解明にはいたらず、今後の継続した調査の必要性を生じさせる結果となる。

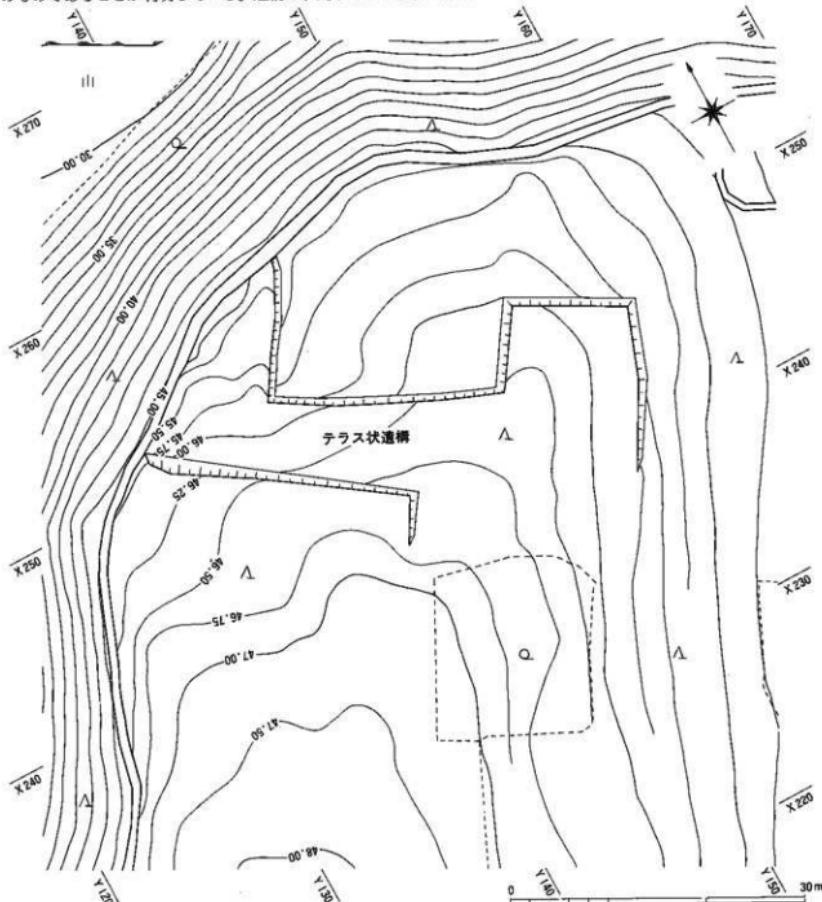
註① 本文では、遺構の性格がはっきりせず不確実なため、とりあえず地元で呼称される同名称をそのままもじいた。文中に塚とあるのも便宜的なものであり、この点をご理解いただきたい。

(4) D地区

概況（第4図・14図、図版15の1・2）

丘陵尾根部の北東端に位置し、遺跡全体では北西縁辺部にあたる。標高は、45～50mを測り、緩く北東方向に傾斜する地形を示す。一帯の現況は、杉林及び雜木林である。かつては、畠地として耕作されたものらしく、ところどころに畦の跡が見られる（第4図）。発掘当初、調査対象地としたが、諸条件が重なり調査を断念した。

当地区は、A地区の隣接地であり弥生集落跡の延びが予想される部分である。また、先の分布調査では、テラス状の遺構（第14図）が確認され、古絵図に印された“堂千坊”的跡と思われたが、その後、絵図を再検討した結果、別のものであることが判明している。遺構は、周りと30cm前後の落差をもつ平坦面が、鍵の手状に広がるものである。



第14図 テラス状遺構平面図 (1/500)

(5) E地区

概況（第4図）

丘陵尾根部の頂部西側斜面に位置する。遺跡全体では、中央の西側縁辺にあたり。標高は、50～61m前後で西側ほど傾斜がきつい（第4図）。現況は、杉林で整然と若木が植林されている。このため、調査の承諾がまとまらず、今回の調査対象地から除外することとなった。

当地区は、西井龍儀氏の採集成績によると旧石器時代及び縄文時代草創期を中心とする遺物が散布する箇所にある（付資料1）。その遺物量からみて、付近にはいわゆるユニットの遺存が充分に考えられる。また、B地区に隣接することから、弥生の集落跡も広がる可能性が強い。実際、同区で確認された第19号住居跡の一角が当地区に延びていた。

(6) F地区

概況（第4図）

丘陵東斜面部の真ん中を東に下りた一帯である。遺跡全体では中央の東西側縁辺にあたり、標高が、35～41mを測る。現況の地形図では、等高線の間隔がわりあい広く、東に傾斜した緩斜面が続くよう思えるが、現地を見ると中を通る小道を境に上と下とでは、かなりの落差があるように感じる（第4図）。当地の現況は、大半が墓地で残りが畠地・果樹園として耕作されている。当初、墓地以外の箇所を調査対象に含めたが、E地区と同様に同意がまとまらず未調査区域となった。

当地区は、A地区から延びる弥生住居群が遺存することは確実である。特に、同地区に隣接した北側部分は、A地区の中でも最も遺構密度が濃い箇所であったし、また、S X01とした方形の溝区画遺構（墳墓？）と同種のものが立地する遺構の延びも確認している。さらに、地区内に含まれる墓地には、かなり年代が古そうな墓や五輪塔の部位が多く見られ、周辺にはこれらに関連する中世以降の遺構が残る可能性が考えられる。

(7) G地区

概況（第4図）

丘陵東斜面部の南側、遺跡全体では南側縁辺部に位置する。標高30～36mの箇所で、西側D地区とは間を通る小道を挟んで一段低くなる。地形は、かつての耕作に伴う整地のためか、一部に広めの平坦面が見られるものの大半が、階段状を呈して東に下りる（第4図）。一帯の現況は、わずかに畠地が認められるほか杉林・竹林・荒地で見通しが悪く、作業条件及び調査の同意がまとまらないことを考慮して、今回の調査箇所から外すこととした。

当地区は、（伝）行人塚の正面部側に面しており、付随施設や参道もしくは墓道といった関連遺構が立地する区域としてまず挙げられる。いつ頃つけられたものか明確ではないが、現在も麓から塚の方向に向かう小道が地区を横切るかたちで延びており、当該地区調査の必要性を強くしている。

(8) H地区

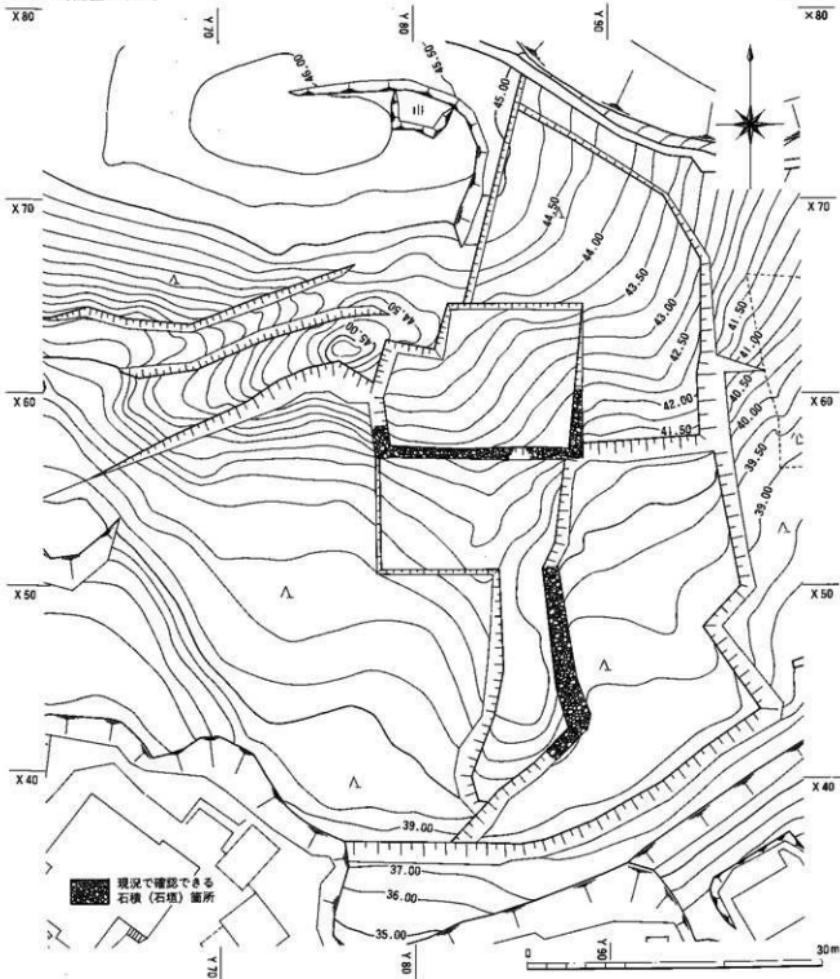
概況（第4・15図、図版15の3～6）

丘陵尾根部の南西端、ちょうど等高線が狭く込みあう箇所からやや間隔がひらき、南側の平野に緩くせり出すあたりに位置する。遺跡全体としては、南西側縁辺部にあたり。標高は39～45mを測り、等高線が込みあうせいか、北はかなりの落差を感じる。また、南側は緩く傾斜し、段差をもって平野部に続く地形である。その裾部は、現在、カットされ、宅地や道路となっているものの、もともとはさらに幅があったようだ（第4図）。現況は、東から南側にかけて竹林が続き、北西にかけて杉林・雜木林となり、全体に見通しが悪い。発掘当初、当地も調査対象地としたものの、協議を重ねたが調査の同意がまとまらず今回の調査は断念した。

当地区は、古絵図の“天見六郎屋敷跡”的当地である。東西約70m・南北約80mの範囲に丘陵をカットした平坦

面や切りどうしが見られる（第15図）。平坦面は、軸を方位にのせ階段状に整然と配置されている。未調査のためはつきりしないが、中央最上壇の平坦面が一帯でも主要な建物跡で、それを取り巻くように他の施設が配列されているものと考えられる。その平坦面の東・南・西の法面には高さ40cm前後で石積み（石垣）が確認され、入り口と思われる箇所では内側に入り込むように設置されていた（図版15）。また、中央最下壇の平坦面東側の法面でも石積みが確認でき、その東・西側にも広い平坦面が続いている。現況では、一区画のように見えるがそれぞれ幾つかに区画されている可能性がある。

（神保）



第15図 (伝)天児六郎屋敷跡平面図 (1/500)

V まとめ

千坊山遺跡は、旧石器から中世に至るまで、長い期間をかけて形成された遺跡である。ただし、全ての時代を通して継続するわけではなく、その間には何回か断絶を繰り返している。また、なかには数点の遺物が採集されたのみの時期もあり、時期ごとの遺構・遺物の量にはかなりの差がある。以下、時代順にまとめる。

旧石器時代

遺物は量としては少ないが、採集された箇所はB地区に限られる。この場所は調査区の中でも最も標高の高いところに位置しており、B地区から南西に続く尾根の稜線上に居住地があった可能性がある。しかし、現在は尾根の半分以上が土砂採集によって削られてしまっている。採集遺物に、ナイフ形石器・剝片がある。

縄文時代

当時期と断定できる遺構はほとんど無かったが、遺物の分布は2箇所に限られた。一つはA地区で、旧運動場とF地区に挟まれた一帯に集中しており、もう一つはB地区に分布がみられた。これらの一帯では、弥生時代以前にすでに人々の生活の営みがあったことがうかがえる。遺物は、土器・石器（石鏃・磨製石斧・打製石斧・叩き石・エンドスクレーパー・ピエスエスキュー・尖頭器・有舌尖頭器）・玦状耳飾りなどがあり、時期的には草創期・前期末葉・中期後葉・後期末葉のものがある。

弥生時代

今回の調査で遺構・遺物とも最も多くを占めるのがこの時代である。その分布状況は丘陵の北半分に偏り、南半分では土器が疎らに分布する程度である。

弥生時代の集団関係のあり方については、和島誠一氏、近藤義郎氏、都出比呂志氏、高倉洋彰氏らの研究がある〔田中1979・久々1984〕。それによれば、弥生時代の集団関係は世帯共同体・農業共同体・政治的共同体の3つで成り立っている。世帯共同体は家族的・単位的な集団で、景観的には竪穴住居数棟と高床倉庫と納屋で構成されている。農業共同体は複数の世帯共同体を包括する集団で、複数の小集落ないし一つの大集落で構成される。政治共同体は農業共同体が相互に共存していくために、それぞれの長が集まって構成された調整機関である。

また、麻柄一志氏は、富山平野にある弥生時代末～古墳時代初頭の集落を3つに類型化している。それによれば、中型・小型住居1～2棟で構成されるものを第I類型とし、大型住居1棟、中型・小型住居がそれぞれ1+α棟、倉庫で構成されるものを第II類型、そして第II類型とした住居跡群が複数で構成されるものを第III類型としている〔麻柄1986〕。第I類型は一定の機能をもち帰属するべき集落をもつものであり、第II類型・第III類型はそれぞれ先述の世帯共同体・農業共同体の集落に対応するものといえる。千坊山遺跡は、大型（Aタイプ）3棟・中型（B1タイプ）5棟・小型（B2タイプ）9棟・規模不明5棟の合計22棟の住居跡がある。今回は確認できなかった倉庫や納屋も実際は存在すると考えられるので、当遺跡は第III類型で農業共同体の集落にあたるといえよう。

弥生時代の集落の存続時期は、土器からすると月影段階におさまる。土器から各住居跡の時期を考えると、月影段階のうちでも大きくは2段階に分けることができる。月影I式期に入る住居跡・遺構にはS I 01・02・03・25、SK 03、月影II式期に入るものはS I 04・06・11・15・19が挙げられる。後者は月影II式期のうちでも古い段階と思われ、高杯でいえば底部が丸味をもつものが無いなど、古墳時代の色はまだ薄い。なお、25棟中9棟しか挙げなかったのは、時期を決定する材料となる遺物が、遺構確認面から採集されたものに限定されたことに因る。時期の分かる住居跡から見る平面形の傾向は、月影I式期では方形が多く、月影II式期では円形・方形がセットで組み合わさる。ただし、9棟のみということや、平面形が全面的に分かれるものが少ないとから、今後の調査によっては変動する可能性も十分ある。

弥生時代の一般的集落構成は竪穴住居・倉庫・墓から成るが、今回確認したのはこのうちの竪穴住居跡のみである。穀物を収納する倉庫や、墓地が造営された場所なども集落の景観を探る上で重要な問題であり、今後の課題となつた。ところで、遺跡周辺には古墳時代初期に築かれた王塚・勅使冢古墳がある。千坊山遺跡に形成された弥生時代末の集落は、それらの古墳を築き出す集落の前身であるとも考えられる。

古代

須恵器、古代土師器がA地区北側、B地区、行人塚周辺で数片採集されたのみである。また、どれも遺構に伴うものではなく、その意味は判然としない。しかしながら、この時期にも人々がわずかでも丘陵を利用していたということの証拠になろう。

中世

(伝) 行人塚が築かれる。二重の周溝を巡らし、四面葺き石のマウンドをもつこの塚状遺構の規模は、外溝外端で25~26mを測る。埋葬施設は、現在のところ確認していない。造営された時期は、出土した珠洲焼・土師皿から13世紀後半~14世紀前半とおさえられる。

北陸で確認されている中世の塚・墓のうち、方形のマウンドの周囲に溝を巡らす例をみると、規模が一辻5~10mで溝は一重のみのものが一般的である。県内には、柳田古墓、杉谷日蓮跡、吉倉B遺跡など、一辻6~14mで一重の溝を巡らす例がある。溝が二重になる例はほとんど無く、あったとしても、もとは一重だったものを拡張することが目的で、造営当初から二重にする例は現在のところ見受けられない。

県外では二重の溝を巡らす例として京大理学部遺跡B E 29区の火葬塚遺構がある。これは貴族の墓所にあり、一辻15mで埋葬施設は確認されていない。火葬塚については、「必ずしも納骨されない火葬所の跡地に構えを設けて後世に伝えようとする例」が文献上存在し、これらは「陵墓や火葬墓と区別して「火葬塚」と称している」という【岡田・吉野1978】。行人塚は、その形態によく似ているが、規模はそれすら大きく上回る。千坊山遺跡において、何故このような特殊な形態がとられたのか、また行人塚はどんな性格の施設なのか、その解明は今後の調査を待たなくてはならない。

一方、塚状遺構以外の中世の遺構では、行人塚造築とほぼ同時期、すなわち13世紀後半から14世紀前半の土師皿が出土した溝が一条あるのみである。しかし、F地区内にある墓地には五輪塔などの石塔が多く見られることもあり、周辺には他にも遺構がある可能性が考えられる。

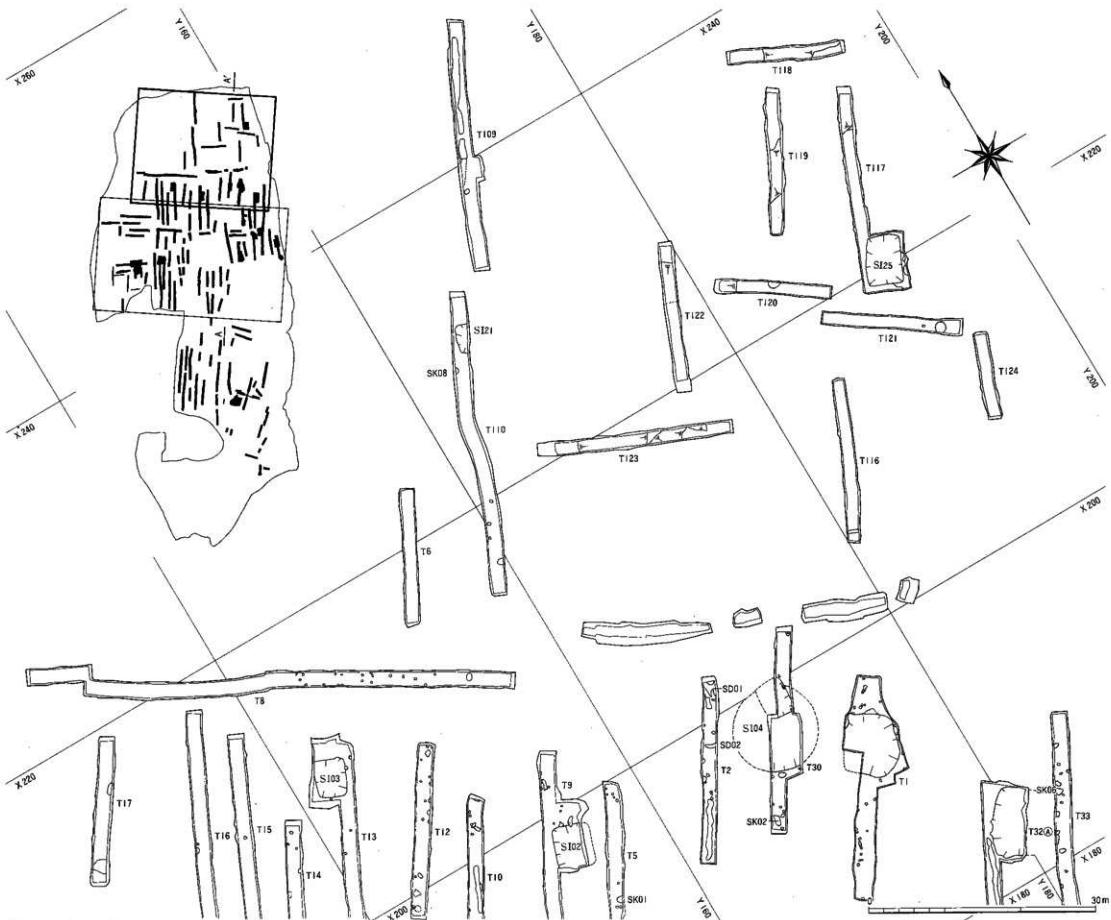
千坊山遺跡は、東に丘陵をひかえ、南西には井田川・山田川が流れしており、非常に恵まれた環境の中にある。ゆえにこれより北方に続く河岸段丘とともに、早くから人が住み着き、集落を形成してきた。その歴史は狩猟・採集の時代に始まり、このひとつの丘陵だけでもこの一帯のおおまかな歴史の流れを追うことができる。

今年度の調査は試掘調査を主体とするものであり、おのずと限界があったことは否めない。当遺跡の実体の把握には、今後(伝)天鬼六郎屋敷などの伝承がらみの場所やその他の未調査地区の調査、あるいは今年度の調査で残された課題の究明など、さらに継続した調査が必要である。それによって、千坊山遺跡の総合的な景観や、利用方法の時代的変化が明らかになるとだろう。また、遺跡一帯は周辺遺跡をみても、歴史的に重要な地である。千坊山遺跡自体の詳細な調査に合わせて、周りの遺跡、現在広く知られていない塚の調査など、もう少し時間をかけて千坊山遺跡の位置づけや背景を探っていく必要がある。

(片岡)

参考文献

- ア 麻柄一志 1986「赤生・古墳時代集落の変遷—北陸地方の住居址群分析ノート」『大境』第10号
オ 岡本淳一郎 1991「婦中町富崎地内探査の遺物」『大境』第13号
カ 上市町教育委員会 1982「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編」
上市町教育委員会 1984「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・絆板編（本文）一」
キ 京田良志 1976「富山の石造美術」富山文庫5
京都大学埋蔵文化財研究センター 1978「京都大学構内遺跡調査研究報告」
コ 小杉町教育委員会 1991「小杉町中山中道跡発掘調査概報」
サ 佐伯哲也 1991「富崎城基跡の変遷」『大境』第13号
タ 高瀬保 1993「—絵図のバリエーション—『長沢諸事集覽之図』について」『解説図録古絵図は語る—立山・イメージとそのカタチ』立山博物館
大門町教育委員会 1981「串田新遺跡II—北東地区の範囲確認調査」大門町埋蔵文化財調査報告第2集
ト 富山県埋蔵文化財センター 1993「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」
富山市教育委員会 1975「富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告」
富山県教育委員会 1993「富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(3)・(4)」
富山県教育委員会 1975「富山県朝日町御田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査報告概報」
成瀬昌示 「事勝神風物語」
ニ 西井龍儀・藤田富士夫 1976「風羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号
新潟県和島村教育委員会 1992「八幡林遺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第1集
ホ 北陸中世土器研究会 1992「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」
北陸中世土器研究会 1994「中世北陸の寺院と墓地」
フ 婦中町 1967「婦中町史」
婦中町教育センター 1985「わたくしの郷土」ほくらの郷土シリーズNo.3
婦中町古里公民館・婦中町教育委員会 1994「ふるきよ—郷土の歴史と文化・再発見—」
古川登 1994「北陸型四隅突出型埴丘墓について」『大境』第16号
婦中町古里小学校・創建百周年記念事業実行委員会 1973「古里小学校百年のあゆみ」
ミ 古岡康暢 1989「珠洲の名所」珠洲発資料館



第16図 A地区 造構配図 (1/500)

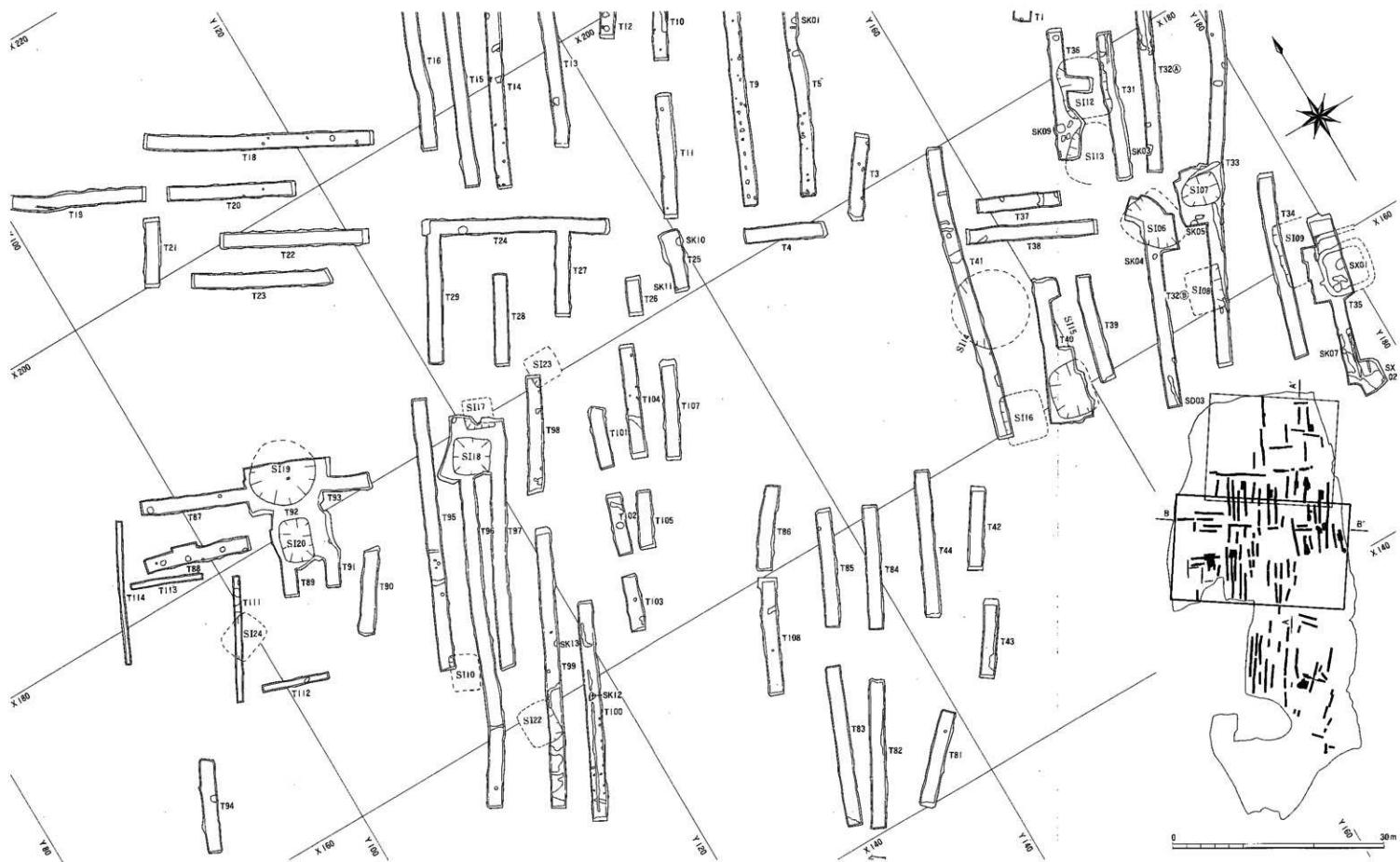
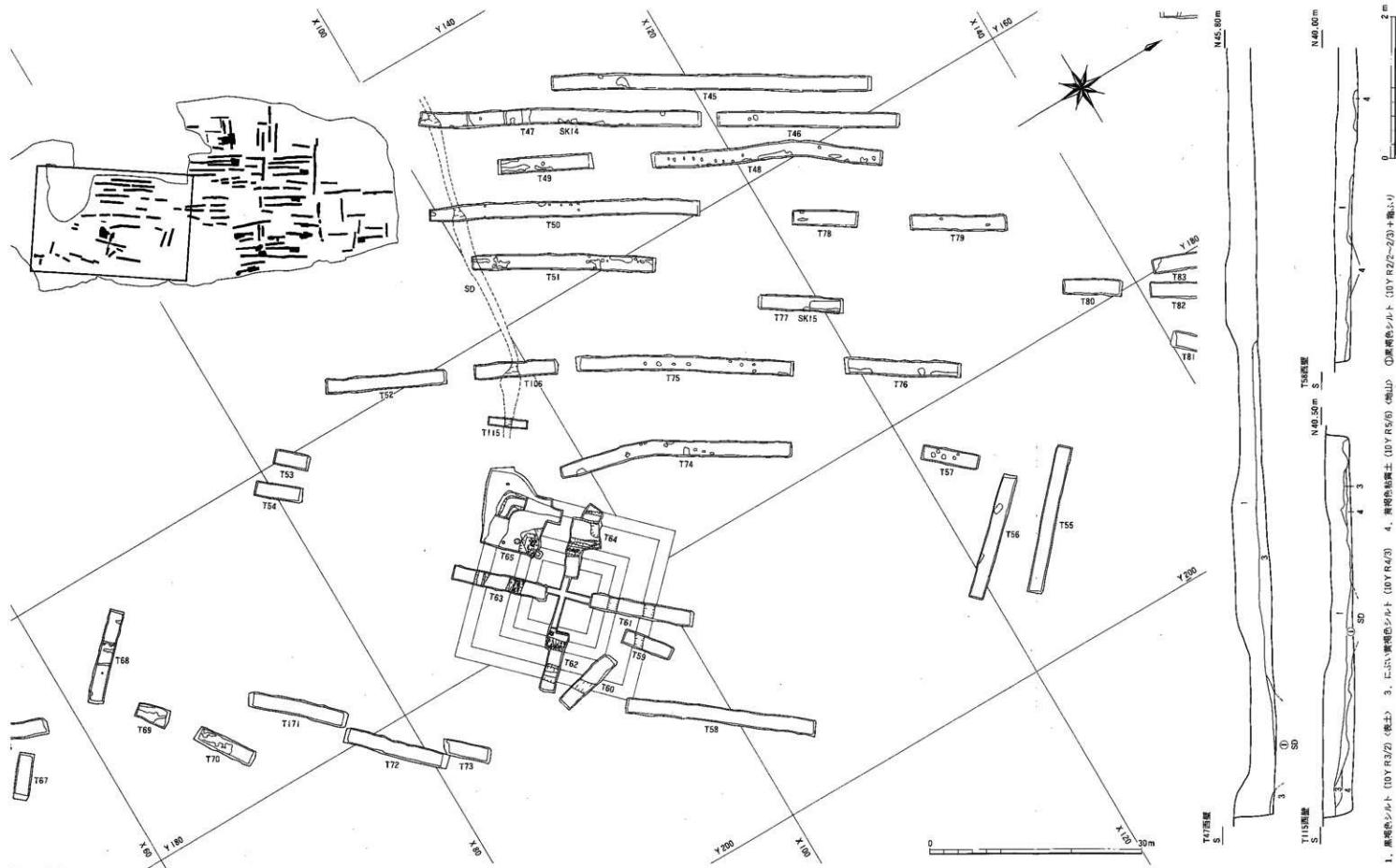
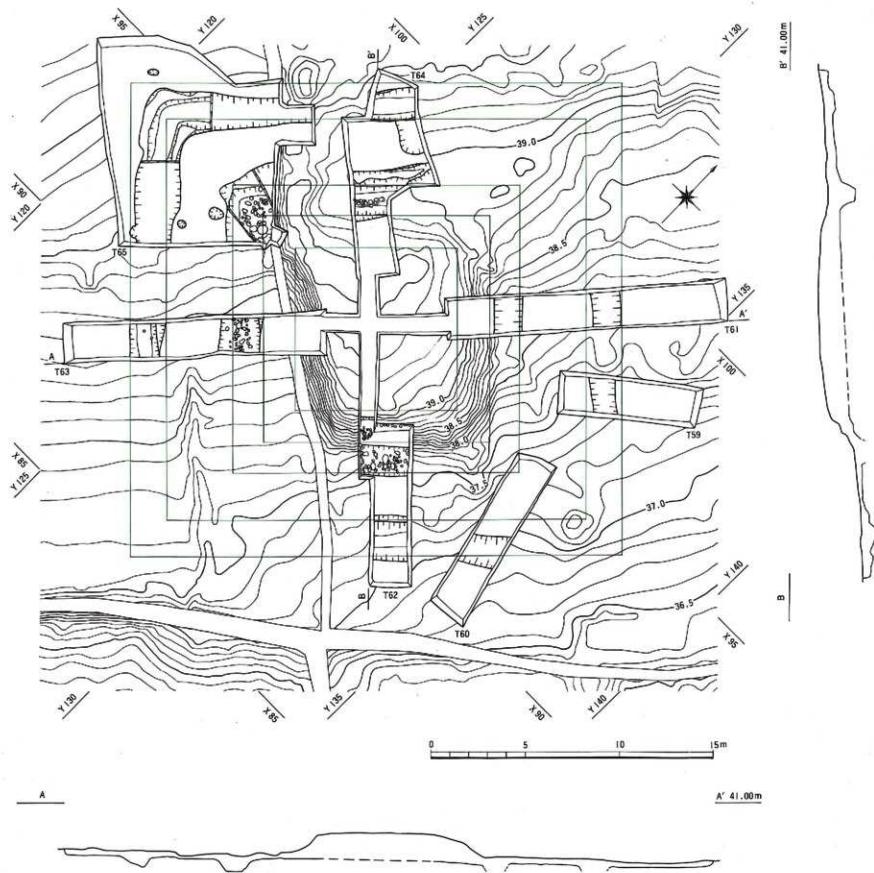


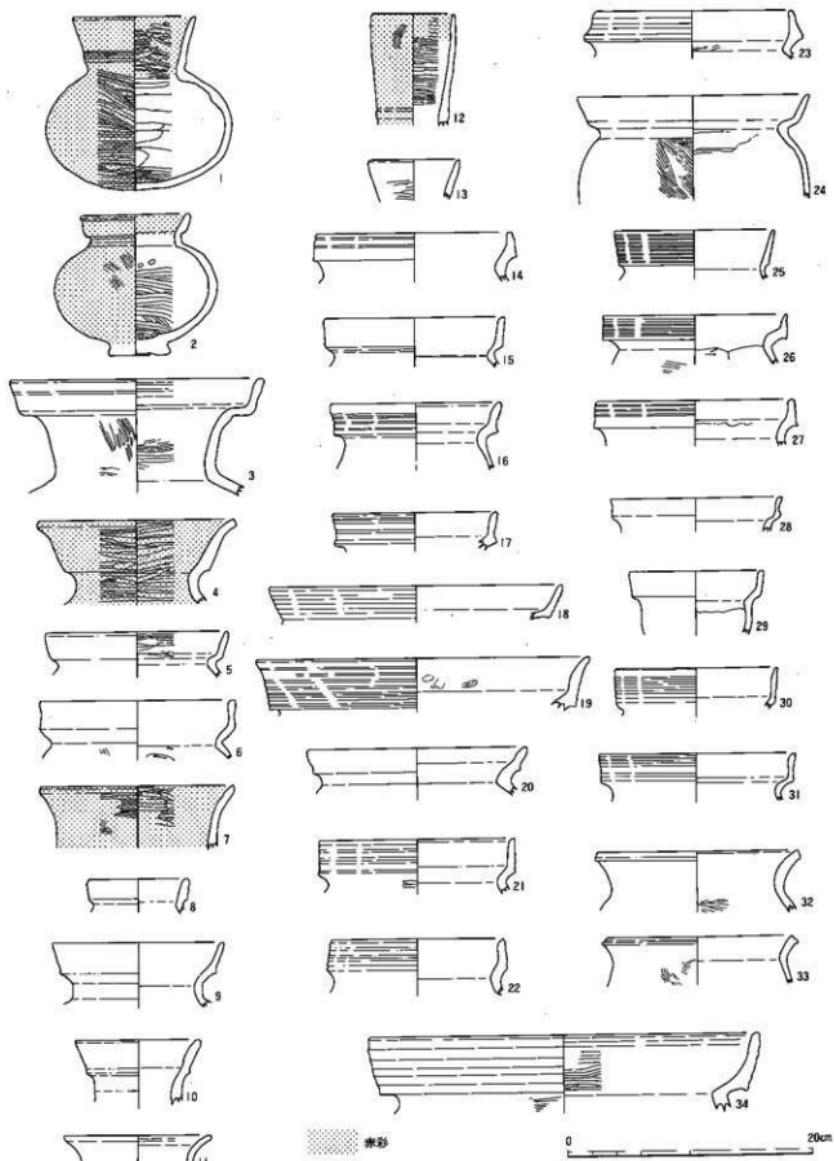
図17 A・B地区 造構配置図 (1/500)



地区 造構配置図 (1/500) 及び土層断面図 (1/50)

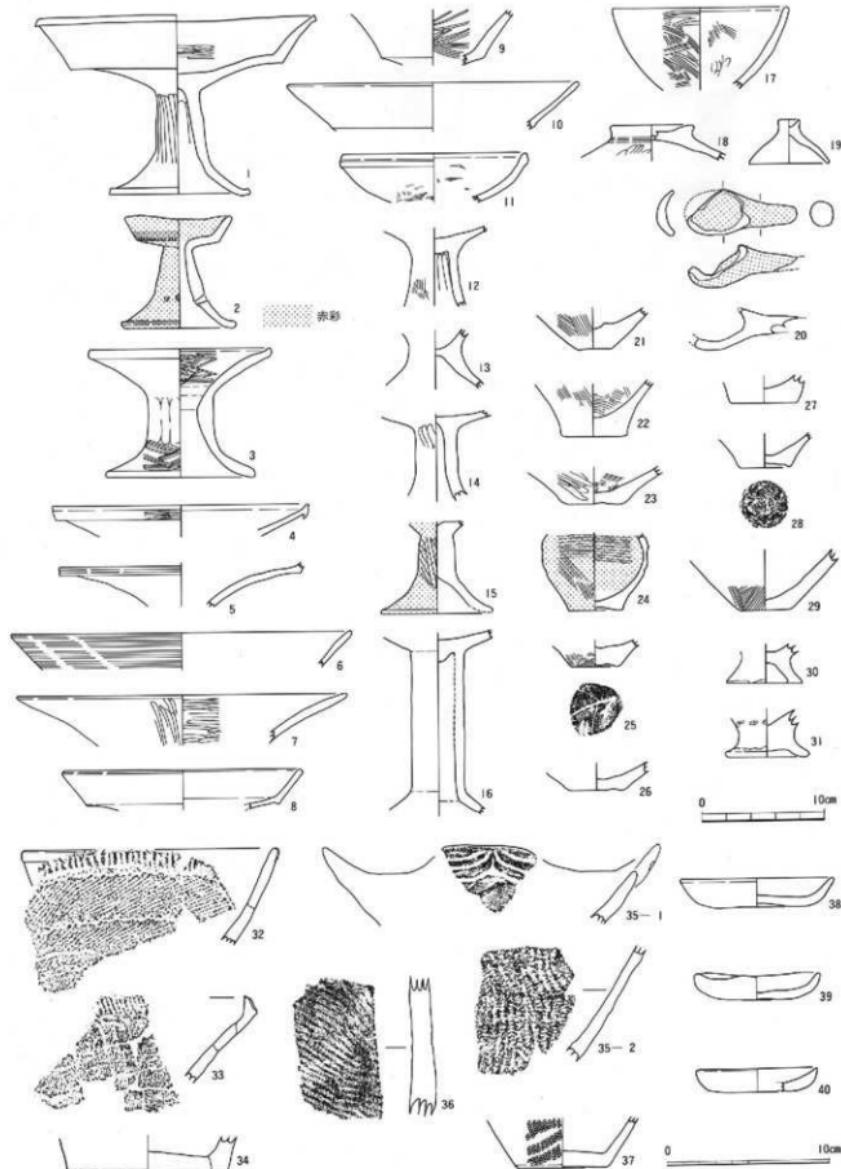


第19図 (伝)行入塚 平面図 (1/200)



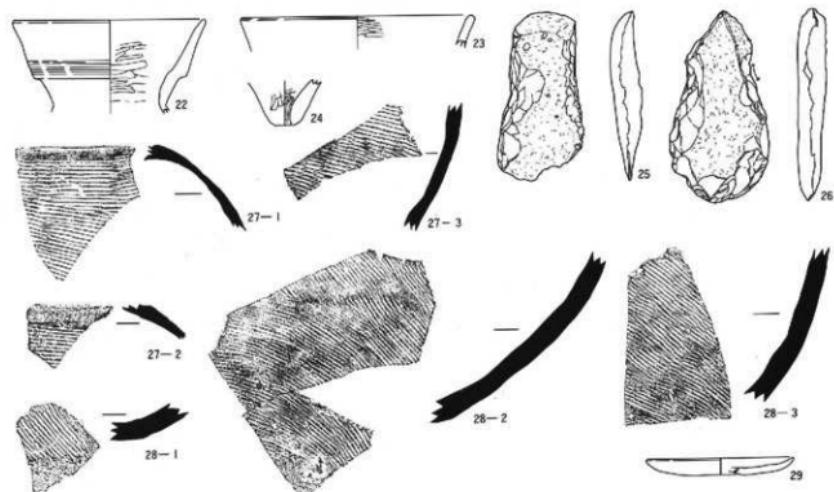
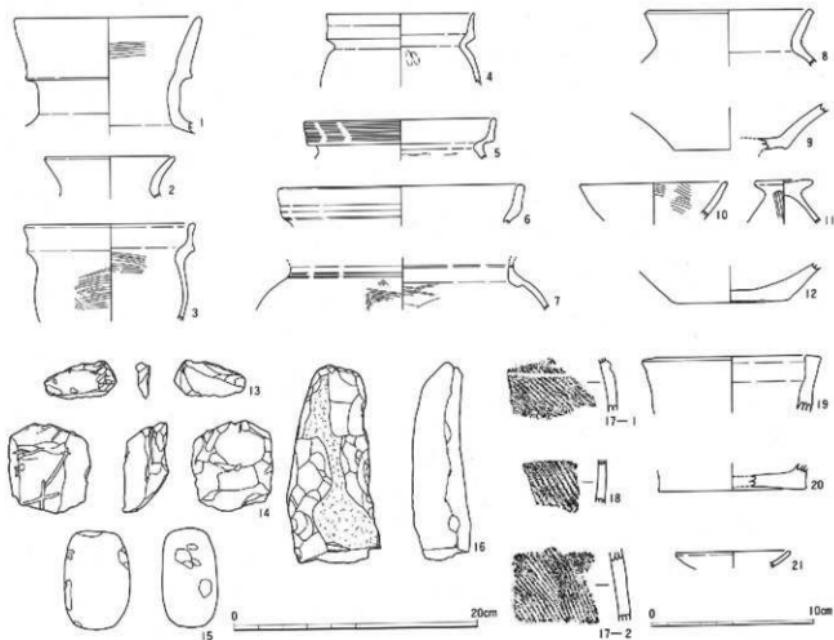
第20図 A地区 造物実測図 (1/4)

SI01 : 14、SI02 : 3、SI03 : 5・6・15~18・32、SI04 : 1・12、SI06 : 19~21、SI11 : 2・4・7・8・22・23、
SI15 : 24、SI25 : 9・10・25~28・33、SK03 : 34、T1 : 29、T30 : 13、T35 : 30、T10 : 11、X205Y171 : 31



第21図 A地区 遺物実測図 (1~31:1/4、他は1/3)

SI01: 12・20・22~23・31、SI04: 24、SI06: 4・13・29・30、SI07: 32~34、SI08: 17・21、SI11: 1~3・11、
SI15: 5・6・9、SI25: 7・8・16・25、SX01: 19、SX02: 18・35・37、SD01: 36、SD03: 39~40、
SK03: 10、T30: 14・27、T32B: 26、T35: 15、T110: 28、X199Y166: 38



第22図 B・C地区 遺物実測図 (1~16・23~30 : 1/4、他は1/3)

B地区 SI19: 1~6・8・9・11・12, SI24: 7・17・18, T111: 13・14・19・20, T112: 10・21、表採: 15・16

C地区 (伝)行人塚: 22~29

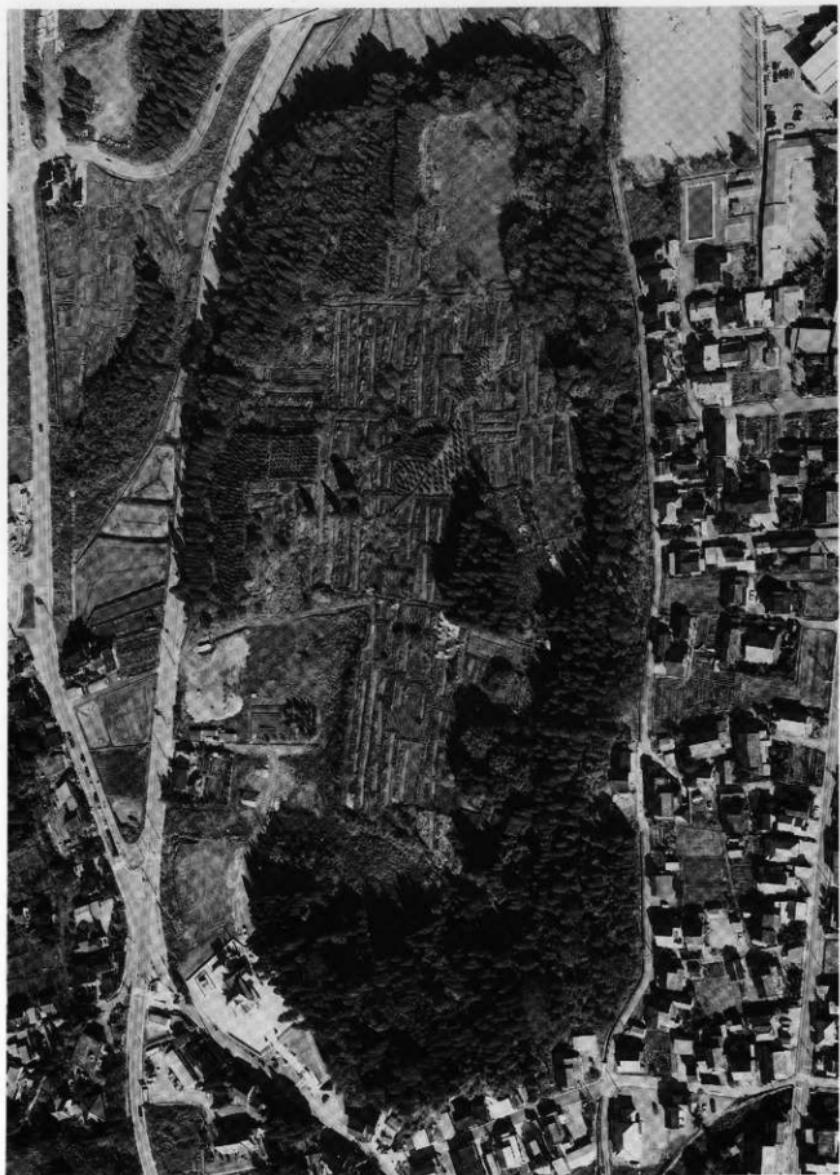


図版1 周辺の航空写真 国土地理院

昭和50年9月撮影



図版2 千坊山遺跡遠景（南より）



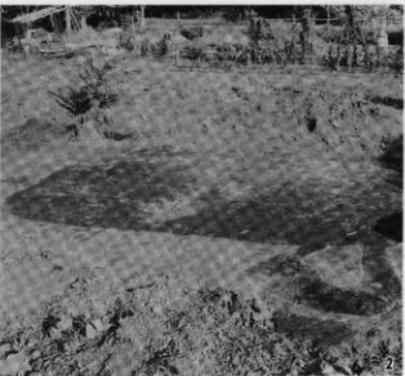
図版3 遺跡全景



図版4 1. 遺跡遠景（東より） 2. A地区全景（南より）



1



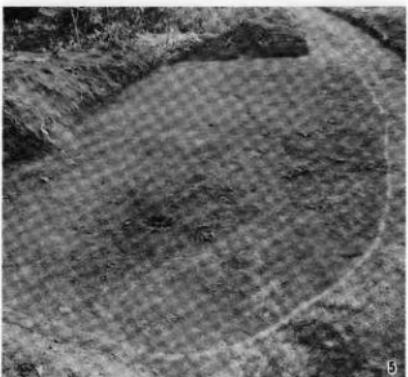
2



3



4

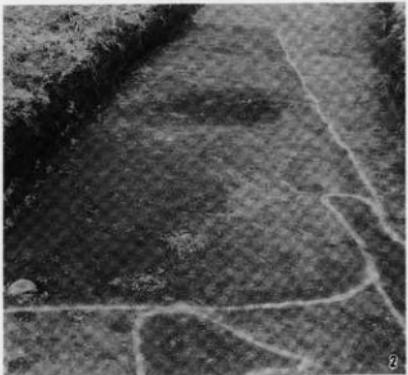


5

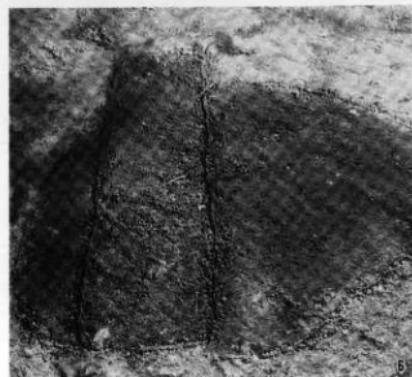
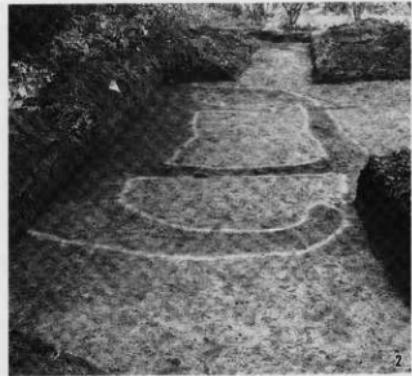


6

図版 5 1. 1トレンチ住01（北より） 2. 9トレンチ住02（西より） 3. 13トレンチ住03（北より）
4. 30トレンチ住04・11（南より） 5. 32Aトレンチ住05（北より） 6. 30トレンチ住04・11遺物出土状況



図版 6 1. 33トレンチ住07 (北より) 2. 同住08 (南より) 3. 36トレンチ住12 (北より)
4. 40トレンチ住14 (北より) 5. 96トレンチ住18 (北より) 6. 41トレンチ住15 (南より)



図版7 1. 117トレンチ住25（南より） 2. 35トレンチSX01（北より） 3. 32Aトレンチ穴03（東より）
4. 35トレンチ穴07（東より） 5. 32トレンチ溝03（北より） 6. 100トレンチ焼壁ピット（南より）